



Go

HOME

近刊告知

既刊案内

ショッピング

エルクシリーズ

リンク集

## Web Contents

▶ [HOME](#)

▶ [近刊告知](#)

▶ [既刊案内](#)

▶ [ショッピング](#)

▶ [エルクシリーズ](#)

▶ [リンク](#)

作家生活三十年 記念出版

小 檜 山 博  
全集 〈全八巻〉

作りましょう、「私の本」

エルクシリーズ  
通常出版  
共同出版 自費出版

## HEADLINE

## EVENTS

原稿募集

### 優秀者作品紹介

#### 父性のスケッチ

松本 敬子 著

松本敬子著『父性のスケッチ』の全原稿を45日間掲載いたします。  
本作は弊社の〈新人原稿募集〉への応募作品であり、残念ながら弊社からの出版には至っておりませんが、編集スタッフからもこのまま眠らせてしまうのは惜しいという声がありましたので、WEB上でのご紹介をさせていただくことになりました。  
下記のプロフィールにもある通り、松本敬子さんは第八回長塚節文学賞短編部門で大賞

### 新人原稿募集



▶ [あなたに最も影響を与えた人物を教えてください](#)

▶ [読みドクコーナーはこちら](#)

## BY STAFF

 [スタッフコラム](#)

原稿募集  
優秀者作品  
松本敬子著  
「女性のスケッチ」  
公開中

オンライン  
ショッピング 

▶ [ご利用方法](#)  
▶ [特定商取引法に  
基づく表示](#)

  
わっしょい倶楽部  
(株) 柏艦舎サポートクラブ  
●●● 入会のご案内 ●●●

  
柏艦舎学校事業部  
文芸翻訳家養成校  
インターカレッジ  
札幌

を受賞されています。審査員の立松和平氏をして「作者の力量を感じることができる」と言  
わしめた実力派です。

読後の感想など、お寄せいただければ幸いです。

【著者略歴】松本 敬子（まつもと けいこ）

昭和29年1月 愛媛県生まれ。

昭和51年、慶應義塾大学法学部政治学科  
卒。

平成12年『時空を越えた恋』でデビュー。

（この作品は復刊ドットコムサイトで復刊  
に向けて、ただいま、投票募集中）

平成16年、第八回長塚節文学賞短編部門  
にて『幸せの翠』大賞受賞。

『四季の城下町』ほか。

柏艦舎バナー

ご自由にお持ちください

Sapporo HakuRoSya

柏艦舎 

[プロローグ](#)   [1-1](#)   [1-2](#)   [2](#)   [3](#)   [4](#)   [5](#)   [6](#)   [7](#)   [8](#)

お詫び

本作品の掲載は9月4日 12時からを予定しておりましたが、作業に遅れが出たために 13時 15分からの掲載となってしまいました。楽しみにお待ちいただいた方には、お詫び申し上げます。

---

[HOME](#) / [近刊告知](#) / [既刊案内](#) / [ショッピング](#) / [エルクシリーズ\(持ち込み原稿・共同出版・自費出版\)](#)  
[リンク集](#) / [原稿募集](#) / [会社概要](#) / [サイトマップ](#) / [English](#)  
[翻訳コンクール](#) / [わっしょい倶楽部](#) / [お問い合わせ](#)

株式会社 柏艦舎

〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目2番 井門札幌ビル5F

TEL 011-219-1211 FAX 011-219-1210

Copyright 2001-2005 Hakurosy Co.Ltd. All rights reserved

## 父性のスケッチ プロローグ

二十歳を迎える私の、今までに読んだ本で親の心に触れた感動作品といたら左記の二冊である。

『母の曲（原題はステラ・ダラスというらしい。最近知った）』

そして、『女の一生』いわずと知れたモーパッサンの代表作。

小学生の頃、表紙に描かれた金髪碧眼きんぱつへきがんの少女の美しさに引かれて手に取った本が『母の曲』だった。

ハーバード出身の若きエリート青年が傷心時代に知り合った、気がいいだけが取柄とりえの無学な女ステラと結婚する。しかし、一児をもうけるも教養の違いから心が離れていき、やがて離婚。美しく育った一人娘ローレルはステラの言動に恥ずかしさを感じるも、優しいゆえに母親かばを庇いつづける。娘の将来にとって自分の存在が陰を落とすと気付いたステラが、ローレルの社交界デビューを見届けて静かに去っていくという哀切感の残る物語。

中学に入って『女の一生』を読んだ。これは、読書感想文を書くための選定課題図書とくごの五冊の中の一冊だった。純真に育ったジャンヌが結婚相手に裏切られ、一人息子ポールへの盲目の愛にのめり込み、気が付けば頭髪が真っ白になっていた場面は我がことのように心が痛んだ。

この二冊が好きなのは、母性を語る名作だからだ。「では、父性を語る物語では？」と自問すると、答えが出ない。私の読書量が少ないせいもあるのだが、父性について語った物語は少ないような気がする。

（本当は、母性よりも父性のほうが強いのではあるまいか……）

平成十六年、十七年の出来事を経て、私は父性の強さをしみじみ実感している。

## 父性のスケッチ 1-1

平成十七年も、ようやく暮れを迎えようとしている。この二年間に起きた出来事をなぞった時、「疲れた……」というのが正直な心。

我が家にいいこと悪いこと(いいこと・悪いこと半々ならよかったのだが、いいこと一割・悪いことが九割と言えた)ドバツとやってきた。平成十八年という新しい年が希望に満ちたものであるように、と祈る気持ちだ。

( だけど…… )

勉強机に向かいながら、ふとしてみる。人間、誰しも平坦な一生はあり得ないはずだ。悪いことが起きるからこそ、いいことの嬉しさが数十倍も数百倍も心に広がるのではないだろうか。二十歳になる前に、社会を構成するにあたっての重要な「核」といえる「親子の情愛・家族の絆の大切さ」を知り得た私は幸せなのかもしれない。そんな風に思える。

一割ほどのいいことというのは、平成十五年の夏(私が高三の夏休み時)に大手新聞社出版部の主催する「青春小説募集。枚数は五十枚まで」という、雑誌の片隅に載っていた広告を見て気軽に投稿していた短編小説が平成十六年お正月早々「大賞に選ばれました」という知らせがきた事。

残り九割の悪いことというのは、六つ違いの姉<sup>みわ</sup>美和の子連れ離婚と三つ違いの兄<sup>しゅうへい</sup>修平<sup>しゅうぼん</sup>の出奔と非情の再会。姉の一件はまだしも、兄のほうは大怪我を負わされて廃人のようになってしまい、今も(おそらく半永久に)入院中のまま。父は毎回見舞いのたびに、兄が好きだった源氏物語の現代語訳を持参して耳元で読み聞かせている。父が朗読しているあいだ、兄は父の顔に視線を当てている。まるで、BGMを聴くようなまなざしで。

私たち家族は兄の意識が突然正常になることを祈り、奇跡の起きる未来を信じて兄を病院に見舞う。諦めたりしない。人間の世界に「絶対」ということなど、ないのだから。

まずは、松飾りもとれない平成十六年一月四日、担任教師から「Z新聞社の支局から学校に連絡が来たぞ。いつ送っていたんだ。山之内、お前の書いた『夕陽の少女』が大賞決定とはすごいじゃないか」と電話があった。

五ヶ月ほど前の夏真っ盛りの話など、すっかり忘れていた。

「大賞？」

「何言ってるんだ。Z新聞社主催の青春文学賞だよ」

「ああ、そうだった」

投函したのは、サウナにいるような猛暑の時だった。受験勉強のウサ晴らしにサラサラ書いて投函したもので、はなから入選するなどと期待していなかった。母親を突然の事故で亡くした少女が幼い頃に離婚して別の家庭を営んでいる父親の元に引きとられ、<sup>かんなん</sup>艱難辛苦の末に幸せな結婚をするというストーリー。

担任から知らされて初めて（送っていたんだ）と思い出した。

「そういえば、年賀状に混じってZ新聞社から封書が来ていました」

「なんだ、開封してなかったのか」

「ばたばたしていて」

私は電話を保留にしておいて、家族宛に届いた年賀状の束と一緒に配達されたZ新聞・出版部と刷り込まれた横長封筒の封を手でちぎって開けた。

「あら、本当。表彰式は二月の建国記念日に弊社ビル内で、と書いてあります。東京なんて地理が皆目、分からないし、二月だと入試日と重ならないでしょうか」

「大賞受賞者が欠席してはまずいだろうが。それにしても、たいしたものじゃないか。文才があるんだな。確か、<sup>やまのうち</sup>山之内の第一志望校は京都T女子大だったな。今回のことで、かなり面接で有利になったじゃないか。校長先生も名誉なことだと喜んでおられたぞ」

兵庫県南部の人口八万弱の田舎町に住む県立N高三年の私が大手新聞社の文学賞を取って本が出るとなったら一躍時の人だ、と担任は褒めちぎってくれた。

「八日の三学期始業式のあとで正門前で写真撮影させてくれて、支局の記者が言ってきている。カラーで新聞に載るんだ。Z新聞といえば、日本一の購読者数を誇る新聞社だ。本当に良かったなあ」

「はあ、そうですねえ」

「なんだ、たいして嬉しくなさそうな声じゃないか」

「そんなことないです。やっぱり嬉しいです。とても嬉しいです」

担任にはそう言って電話を切ったものの、我が家はその時それどころではなかったのだ。

年の暮れ、西宮の老舗酒造メーカーの跡取り息子と結婚していた六つ違いの姉が一歳になったばかりの息子俊太郎を連れて帰ってきた。

「もうやっでいられない」と憤懣やるかたない様子だった。

「『町医者、町医者』と二言目にはうるさい。老舗の酒造会社がどれほどのもんだって言うのよ」

姉は「ほとほと、疲れた」と言った。実際、目の下に隈が出ていた。どんな時もグッと顎を上げて生きる姿勢を崩さない強気な姉だったが、今回ばかりは本当に憔悴しきっているように見えた。

「相手の家は関西屈指の事業家の家だしとりわけ姑さんがかなり見識高い人だと聞いていたから、最初から波高い門出だと覚悟はしていたが……」

小さな内科医院を開いている父は眉間にキュッと立て皺を寄せた。この前年に還暦を迎えていた父は近所の人たちから「鶴先生」と呼ばれて慕われていた。長身で痩せていたのと、名前が鶴一というからだろう。開院時間は朝の八時半から夕方五時だが、自宅が医院の上階ということもあって、時間外でも患者が来ると「おや、どうしましたか」といやな顔一つ見せず診療室に下りていった。近所の小・中学校の校医も勤めていた。

父は常に飄々と生きていた。小学校で二級下だったという幼馴染の母も父と同様、実に温和な性格だった。体つきから顔立ちまで父とは好一対で、誰の目にも仲の良い夫婦だった。

姉は誰に似たものか、控えめな両親とはまるで違っていた。性格も強かったし、弟妹に当たる兄や私とも顔立ちが違っていた。ごく日本的な顔立ちの家族の中で、姉だけは西洋人のような目鼻立ちをしていた。際立つ美貌といっても過言ではなかったろう。小学生の頃に「才色兼備」という言葉を覚えたとき、私は姉のような人のことをいう言葉だと瞬間的に思ったものだ。

田舎ゆえに小なりといえど開業医の家の子供は注目されがちで、しかも顔も綺麗とあって姉は小さい頃からかなり目立つ存在だった。「田舎医者の娘のくせして意識が高いわねえ」

陰で悪口を言う同級生もいたようだが、自信家の姉はそういうことを意に介することもなくいつも堂々としていた。私は小さな頃から、そんな姉が自慢だった。兄も、たぶんそう思っていたと思う。なぜなら、姉の負けず嫌いは口だけでなく、行動と結びついていたから。

「いい点を取りたいから」と深夜までこつこつ勉強していたし、学校の図書館で飽きたらずに町の図書館に通って手当たり次第、本を読んでいた。それでだろう、文学や音楽、スポーツなど、どの分野も年齢以上の多くの知識を持っていた。

「一流の人と交流するためには視野が狭くては駄目なのよ。どんなジャンルにも対応できる知識を身につけておくことが上昇婚するための条件だわ。理香もたくさん本を読みなさい。自分の直接体験でなくとも、本から学ぶことは多いのだから」

とどのつまり、目指す「上昇婚」への手段として、姉は本をよく読んでいたわけだ。読書への傾倒の趣旨の正誤はともかくとして、この姉のおかげで私もよく図書館に足を運んだ。だからこそ、受賞作品となった『夕陽の少女』を一気に書き上げられたのだと思う。

姉は楽々と神戸大学に進学し、在学中にクラスメイト・高山幸生たかやまさちおからプロポーズされた。

「なあに、あんなチビデブ」

一笑に付していた姉だったが、彼が日本屈指の酒造メーカーの跡取り息子と知った途端、態度が豹変した。かねてより「上昇婚する」と公言していた姉だった。姉はためらうことなくプロポーズを受け入れた。そして、「卒業式の前日に挙式しましょう。そのほうが皆に対してインパクトが強いもの」と、熱を上げている幸生を言い含めて挙式の日をさっさと自分の希望どおりに決めてしまった。

宮水みやみずと呼ばれる西宮のおいしい水をつかったの酒は昔から有名だが、かの地で競合する酒造メーカーの中でも特に歴史と伝統を誇る名家の跡取り息子からのプロポーズは姉を有頂天にさせた。

「週刊Pの慶事という欄で私たちの結婚が取り上げられるそうなの。幸生さんが『小さいけどツーショットの写真も載るよ』って知らせてくれたわ。どんな写真を頼もうかしら。楽しみだわ」

「そんなことより、心構えは出来ているの？ 相手の家が昔からの大きな造り酒屋と知る前は、幸生さんのこと『チビデブがつきまわってうるさい』なんて酷評していたくせして、本当に好きなの？ 背景だけ見て決めては駄目なのよ。分かっているんでしょね」

母がたしなめたとき、姉は「造り酒屋の御曹司おんぞうしという取り得がなきゃ、私だってあんなずんぐりむっくり男のプロポーズを受けないわ。

人生に多少なりと計算は付き物なのよ」と平然と言ったのけた。

「ずんぐりむっくり男だなんて、ひどいことを」

母は顔をしかめた。

「この度の話は、姑に当たる隆子<sup>たかこ</sup>という人がいいように思っていないと漏れ聞いている。大丈夫なのか」

父の言葉に、姉は「あら、何も心配は要らないわ。幸生さんのほうから強く望んだ縁組なのだから」と笑顔で聞き流した。  
「行ってから苦労しないか」

父は「先行きが心配だ」と言った。和歌山のみかん農家の三男坊として生まれた父は、母親の白血病による死をきっかけに医学の道を志した。父の兄二人は今も郷里・和歌山で農家を営んでいる。平凡だが善意の人たちだ。親戚に「土地の名士」と呼ばれる人はいなかった。幸生の親戚筋はと見ると、大臣経験者の大物代議士やら上場企業のトップ・天皇にご進講する著名な学者が綺羅星<sup>きらほし</sup>のごとくそろっていた。しかも、幸生の母隆子は明治の元勳と呼ばれた人の血筋で、「プライドが異常に高い人」と評判の人だった。

## 父性のスケッチ 1-2

婦人雑誌の「名家の自宅訪問」というページに載った写真を姉から見せられたが、卵の殻を取ったようなつるんとしたお公家顔をしていた。一人息子の幸生は母親に全く似ておらず、姉に言わせると「でっぴりしたアンパン顔の父親のほうに、顔だけでなく性格もよく似ている」ということだった。

「田舎町の、それも病院でもない一介の診療所の娘など、高山家の長男の嫁には向かない。親戚連中もふつうの農家だし」

隆子が周囲に不満を言いまわっていることは、早い時期からこちらの耳に入って来ていた。父としても先を案じずにはいられなかったのだろう、何度も「大丈夫なのか」と姉に聞いていた。田舎の小さな開業医など、高山家サイドから見たら吹いて飛ぶ存在だったに違いない。

「日本屈指の事業家の家に嫁いで苦労しないのか。相手の親、特に女親のほうはかなり不満を漏らしているそうだが、大丈夫なのか？」

「『心配しないで』って、幸生さんが言ってくれてるんだから大丈夫よ」

あの頃の姉は本当に楽しそうだった。姉に「大丈夫」と言われてみたら、父としても反対する理由はどこにもなかった。

「分かった。親として出来る限りの嫁入り支度をしてやろう」

父は親の意地を見せて、母名義で購入していた駐車場の土地を担保にして銀行からお金を借りてまで姉のために立派な花嫁道具をそろえた。我々の家庭からしたら、かなりの出費だったはずだ。

神戸一の高級ホテルで各界の著名人を招いての盛大な結婚披露宴をおこなって、最初の一年はなんとか過ぎた。隆子が嫁となった姉美和を好きではなかったにせよ、新婚の息子夫婦と別居するだけの常識を持ち合わせていたからだ。

姉が俊太郎を出産した頃から隆子との軋轢は具現化された。騒ぎは、隆子の「跡取りの俊太郎は芦屋の自分たち夫婦の家で育てる」と言い出したことから始まった。

「俊太郎はマンションでなく、私たちの芦屋の広い屋敷で育つのがいいですよ」

姉夫婦は結婚と同時に、幸生の父高山忠政が資産運用の一つとして購入していた大阪一の高さを誇る大阪・梅田の高層マンションの最上階に住んでいた。二十歳そこそこの若夫婦として、かなり恵まれたスタートを切ったはずだった。

「マンションがいけないと言うのなら、庭付きの家に引っ越します」

そう言う姉を説得にかかったのが、幸生だった。良い意味でも悪い意味でも彼は実におおらかな性格の人間だったから、母親と妻の確執<sup>かくしつ</sup>には全く無頓着だった。実際、学友たちから若旦那という愛称で呼ばれて「ボンボンを絵に描いたような、気のいい人」と言われていたらしい。

「いいじゃないか。赤ん坊って一日の大半を寝ているものなんだし、母さんが責任持って面倒見てやるって言ってくれてるんだから任せようよ」

「幸生さん、俊太郎は私たちの子供なのよ。ペットじゃないのよ」

「そんなの当たり前じゃないか。母さんが『俊太郎を預かりたい』って言うんだからしばらく好きにさせたっていいじゃないか。じきに飽きて返してくるよ。芝居だ、旅行だと出歩いてばかりの人なんだ、言わば『初孫珍し熱』っていうものさ。その熱が冷めるまで預けるといいんだ。しばし気が<sup>な</sup>風ぐというもんさ」

「気が風ぐって、どういうことよ」

眉を吊りあげる姉に、幸生はのんびりした声で答えた。

「今度、従兄弟<sup>いとこ</sup>の義男<sup>よしお</sup>が大臣を何回も経験した東京の代議士の娘と見合い結婚することになったと知って、気分が荒れてるんだ」

義男というのは、隆子の一番姉の末の息子で、幸生と同じ年だった（隆子は四人姉妹の三番目。姉妹それぞれが名家に嫁ぎ、互いが張り合っているらしかった）。

「義男さんのお嫁さんになる人が大臣を何回も経験した代議士の娘さんだからって、何故、お義母<sup>かあ</sup>さんの気が荒れなきゃいけないの」

「母さんってわがまま育ちで勝ち気ときてるから、荒れるとヒステリー症状を起こしていつも大変な騒ぎになるんだよ。対外的に夫婦で出席する場面が多い親父としては、これは弱るんだ。この間も、社内で僕を呼び止めて『母さんの思うようにさせとけ。早いとこ、俊太郎をうちに連れてこい』って言うんだ。僕は美和ちゃんが大好きだよ。だけど、美和ちゃんのお父さんが町医者じゃなくて国立大学の医学部教授だったらもっと良かったかなあと思うんだ。そして、親戚に実業家の著名人が居てくれたらもっと良かったのになあって思うん

だよ。お父さんの兄弟がみかん農家していることは僕としては恥ずかしいとは思わないんだけど、ちょっとだけお洒落しゃれじゃない気がするんだ。正月恒例の従兄弟会の席でも毎回嫁さんの実家自慢が話題になるし」

「町医者の娘で悪うございましたわね」

「そんなにむくれる話じゃないよ。ひがむなよ」

学生時代に知り合って卒業と同時に結婚した二人は、六つも年下の私から考えてもままごと夫婦のように若かったのだと思う。

「俊太郎は、我が家の跡取り孫だから」

頻ひんぱんに隆子が梅田のマンションに顔を出して育児に口をはさむようになると、さすがの姉も姑隆子には面と向かって抗議できない分、夫である幸生に当たり散らすようになってしまった。

坊ちゃん育ちの幸生は母親と妻との間でうまくバランスを取れるような人ではなかった。

「短期間のことなんだから、なんで俊太郎を母さんに任せたらいやなのかなあ」

「私はいやなの。俊太郎の育て方に、いちいち、口を挟んでほしくないのよ」

ということで、夫婦は解体へと突き進んでしまって、とうとう「お義母かあさんの声をきくだけで、辛抱たまらない」と姉は一歳を迎えたばかりの俊太郎を抱いて戻ってきたのだった。

「常に上をめざす」これは姉のモットー。

三つ違いの兄は（私たちは三年間隔で生まれている）、姉のこの気性とは正反対のシャイな性格だった。柔和な面差しの母に一番よく似ていたし、手足がほっそりと長くて「文学青年」という雰囲気が漂っていた。

女きょうだいに挟まれて羊のようにおとなしい兄は読書好きで、外で遊ぶより家の中で本ばかり読む子供だった。姉のような理由からではもちろんない、本当に書物に浸っているのが好きなのだった。かと言って、体育が苦手というわけではない。テニスでは県下一になったこともある。兄は早い時期から夏目漱石や志賀直哉などを読破していた。詩も上手で、小学校の時は校内の目立つ通路の掲示板に兄の詩がしょっちゅう張り出されていた。どの科目もまんべんなく出来ていたが、決してひけらかしたりはしなかった。

父も母も跡取り息子の兄が医者になるのは当然と思ってきたし、周囲の誰もそう思い込んでいた。考えてみたら、兄に一度たりとも「本当に医者になりたいの？」と聞いたことがなかった。何の科目でも成果をあげていたからだろう。兄のほうも、自分の将来について具体的に語ったことがなかったように思う。「<sup>せいひつ</sup>静謐」を絵に描いたようなタイプだった。

当初、私たちは俊太郎を連れて実家に戻った姉を幸生が即座に迎えに来るものと思っていた。しかし、一週間たっても十日たっても電話もかけてこないし、一度も出向いてこないのだった。

「私たちのほうから訪ねてみよう」

不安がる両親に、姉は「放っておいて」と言った。

「お義母さんが妨害しているのよ」

「妨害だ何だと意地を張らずに、よく話し合えないといけない」

姉は「あのお義母さんとじゃ、疲れるのよ」と辛そうに答えた。

庭の梅がほころびかけた頃、前触れもなく「高山家の代理人」と名乗って<sup>ねづしろう</sup>根津司郎という弁護士が我が家を訪れた。

「<sup>ふくすい</sup>覆水盆にかえらずということはこちらとしても残念ではありますが、俊太郎さんを渡してくれるなら、慰謝料もその分考慮させて戴きます」

年齢は四十幾つかだろうと思えたが、脂ぎった顔の唇のめくれたような、いかにも品のない顔付きの弁護士だった。

「応接間にお茶を運んだ時に垣間見たけれど、老舗企業の顧問弁護士ならもっと品のいい知的な顔をしているのかと思ったわ」

彼が去った後で「顔付きをとやかく言うてはいけないけど、上品な雰囲気のみで無い人ねえ」と呆れる私に、姉は「あの人、会社の顧問なんかじゃないわ。隆子さんの姉妹で雇っている個人的な弁護士よ」と説明した。

「会社の顧問とは別に、ファミリー・ドクターならぬファミリー・ロイヤーってとこかしら。私的なことを依頼してきたみたいよ」

「私的なことって？」

「隆子さんの妹の息子さんがバイク事故を起こしたときに相手が面倒な筋だったのをうまく処理したとか、二番目のお姉さんのご主人が水商売の人と問題起こしたときに外に漏れないようにうまく立ち回ったとか、弁護士というよりも執事みたいな役をしてきたらしい。

『<sup>ちやうほう</sup>重宝な弁護士よ』と冷笑していたの、聞いたことがあるわ」

「重宝な弁護士なんて、この世にいるの？」

「調査員とかたくさん知っていて、いろいろと小回りが<sup>き</sup>利くんだって。姉妹で長電話しているときに『今は弁護士という肩書きがあっても生まれが生まれだから、名士に紹介してやるだけで有頂天になる。すぐに誰それと知り合いって吹聴したがって、馬鹿みたい』ってあざ笑っていたわよ」

「一体、どんな生まれなの？」

「知らないわよ、そんなこと。『どんな生まれですか』なんて問いただしたことなくって、一度もなかったもの。生まれ<sup>うんぬん</sup>云々というより、彼の言動がそういうふうに嘲笑されるものなんでしょうよ」

「ふうん……それにしても、大企業のお家の人って、弁護士さんも道具としか思わないものなのかしらね」

「そういう考え方をするのは、かの隆子さんとその姉妹だけでしょ」

姉はシラけた口調になった。

「今すぐ帰って、『俊太郎は、私どもで立派に育ててみせます』と言っていたと伝えてください」

何度か足を運んできた根津弁護士が「早く渡さないと遺言によって、俊太郎さんが相続から外されますよ」と口にした瞬間、父が「失敬な。お帰り願おう」と一喝したのは隣室で息を詰めて様子をうかがっていた私には実に痛快だった。

風の便りに、離婚が正式に成立していないのに隆子が八方に手を尽くして幸生の再婚相手を探していると知った姉は、「マザコン夫はいらない」と完全にふっ切れたようだった。

平成十六年四月、私が京都市内の大学に入学して家を離れた時期を同じくして、姉は正式に離婚した。

慰謝料や養育費の額などについて、両親にも姉にも定かに聞いたりしなかったが、すべてが隆子の<sup>きしず</sup>指図で進められたという話だった。

「若い頃の過ちは<sup>ゆえん</sup>経験不足の所以だから、どうってことはない」

出戻りと呼ばれる立場になった娘をかばう父に、姉は一言「耐える」と言った。絶対に愚痴を言うことはなかった。母は「強いばかりが武士じゃない、ってことよ」と言った。「それ、どういう意味？」

横から尋ねる私に、母は姉に向き直ると「痛い目に遭って、美和は多くを学んだことでしょう。日頃から私が言ってきかせていたこと、分かったわよね」と言った。

姉はやはり「耐える」とだけ答えた。

「このまま朽ちてなるものか」

姉らしい負けん気を口にして、姉は俊太郎を母に預けて昼間は駅前の英会話学校の講師となった。神戸大学文学部英文学科を首席で卒業という経歴が大いに役立ったらしかった。

独身に戻った姉は小さな子供相手に簡単な英会話の授業ワクをたくさん持たされて「忙しい、忙しい」と言いつつも、生き活きと楽しそうだった。離婚を経験した姉はどこかしら角が取れたようで、私の目には人間的に一皮向けたように映った。

姉の離婚も我が家にとっていい話ではなかったが、それ以上の衝撃が起きたのは同年つまり平成十六年五月だった。

連休の中日に、兄が突然いなくなった。この日が兄の二十二歳の誕生日だった。

「家出のお芝居するような子ではないし、どうしよう」

大学に入ってすぐの休みで、このとき私は京都から実家に戻っていた。甥っ子の俊太郎にも会いたかったし、各地の大学に散っていた友人もこの連休には戻る人が多かったからである。

父も姉も、それぞれの職場に去った午前九時過ぎのこと。

いつまでも起きてこない兄の部屋を覗いて、机の上に残された置き手紙を発見した母は「これ、どうしようかしら。夜のうちに家を出たんだわ。本気なのかしら」と当惑しきった顔で、私に見せた。

「お父さんの築いた医院を継承しなくては、と頑張ってきたつもりですが、今年も結果として現れず、申し訳ない気持ちで一杯です。少し気分転換してきます」

兄らしい几帳面な文字で、白い便箋の中央に三行に分けて書いてあった。

「大きな荷物を持って出たわけではないみたい。<sup>ようふくだんす</sup>洋服筆筒を見たけど、中は特に減っていなかったわ。着の身着のまま、近場に出掛けたんだと思うのだけど……」

私にも何も分からないことだった。

兄は現役で医学部合格を果たせぬまま、神戸市内の全寮制の予備校に入って二年頑張ったが成果なく、「自宅浪人」という形で三浪目の春（平成十五年のことだ）、家に戻ってきていた。

高校時代の成績はよかったし、予備校の模擬試験でも判定はよかった。それなのに、どういうわけか本番になると前夜から熱が出たりして実力が発揮できないのだった。それで、予備校とも相談の上、自宅に戻って次々と送られてくるM社の添削指導を受ける方式に変えた。父も「おとなしいタイプだから、家の中で一人で勉強するほうがいいだろう」と許可した。

M社から次々と教材が届くたび、兄は溜め息をついた。

「僕はね、本当は文学部の国文学科に進みたいんだよね。理香が医学部に行ってくれたらいいのになあ」

「私は文系科目は強いけれど、理系はからっきし駄目。だから、早くから理数科目のいらぬ私立コースにいるのよ」

私が「医学部がいやなら、お父さんにそう言えばいいのに」と言うと、兄は「そうはいかないよ」とかぶりを振った。

「お父さんが苦勞して作った医院を長男の僕が継がないわけにはいかないじゃないか。ただね、生涯かけて綺麗な大和言葉<sup>やまと</sup>を知り尽くしたいという希望は持ち続けているんだよ」

「大和言葉ってなあに？」

「日本の<sup>みや</sup>雅びというべきかな。源氏物語の世界だよ」

雅びと聞いてますます分からなくなった私だが、具体的に「源氏物語の世界」と聞いて（そういう世界なら、お兄さんの雰囲気<sup>きずな</sup>にぴったり）と納得できた。

「理香も読むといいよ」

兄は、当代きっての美文を書く<sup>か</sup>と評判の若手女流作家が現代語訳して話題を呼んだ『源氏物語・現代語』を貸してくれた。

「古文で書かれたほうと比べながら読むと楽しいよ」

「お兄さんって、光源氏みたいね。たおやかで」

兄は「光源氏か」と微笑した。

「古典文学にはまったのは、いつの頃からだったろう。気が付いたら王朝絵巻の世界に憧れるようになっていた。源氏の世界に浸っているだけで僕はすごく幸せなんだ」

兄の不運は、たぶん、子供の頃から全体的に成績が良かったことだろう。努力していたら必ず医学部に入れるものと、周囲はどこか樂觀していたし兄の心中を慮<sup>おもんばか</sup>ることはなかった。

年明けの平成十六年二月初めから私立医大の受験が始まったが、どういうことか、まとも兄は軒並み不合格だった。今回はこれまでと方向をかえて第一志望の神戸大学医学部と同レベルの私立以外に、模試ですべてA判定を取っていた偏差値の低いといわれるところを三つも受けたのだが何故だか三つとも補欠ワクにも入らなかった。

「魔物が邪魔しているとしか思えないわ」

母は「どうして」と、首をひねった。不合格の電子郵便が届くたび、さすがの父も落胆の色を隠せなくなっていた。兄は部屋から出ようとしなくなり、母がお盆に乗せた食事を運んでいた。姉は姉らしく「今こそ、辛抱のしどころよ」と言っていた。いつも強気の姉にしてみたら、兄の繊細さが理解できなかったのだろう。

私のほうはこの時点、日本屈指の大手新聞社の主催する青春小説募集で大賞を得たことが大きく役立って、京都T女子大の文学部に校長推薦を得て合格を決めていた。それで、住居探しのために京都向いて、しじゅう出掛けていた。

「理香の大学が決まって、修平が落ち込まなきゃいいけど」

母は兄の心中を思いやったものの、姉もそして私も「めざす学部が違うんだよ。医学部なんだもの、五浪六浪の人だってザラにいるそうよ」と一向に気にしなかった。兄がどれほど追い詰められているか、考えたりしなかった。医学部なんてそんな世界だと思っていたからだ。

そして、いきなり兄の出奔の日が来てしまった。

あの日、手紙を見せられた父は開口一番、「一週間もしない内に戻ってくるさ」と言った。

「書いてあるとおり、気分転換したいんだろう」

「でも……思い詰めて自殺なんかしないでしょうか」

「馬鹿なことを言うものじゃない。男の子だから数日とんずらしたくらい、心配することもなからうよ」

「修平ったら、置き手紙など残さず口で言えばいいのに。警察には届けなくていいかしら」

「当然だ。こずかい程度の金しか持っていないわけだし、どこに行けるといふんだ」

母の思いをよそに、父は事態を軽く考えていた節があった。しかし、半月過ぎても兄は帰ってこなかった。あちこち、それとなく聞いてまわったものの、一向に行方が分からなかった。三週目が過ぎる頃、一回り痩せてしまった母は姉に付き添われて警察に出向き、家出人捜索願いを出した。

母は心労で憔悴し、人から「修平君は？」と聞かれると「予備校に戻りました」と言葉少なに答えた。浪人が辛くなって家出したみたいで等々、周囲に言える話ではなかった。周りの人達も兄が浪人していることを知っていたから、それ以上言及することなく「来年こそはうかることを祈っています」と引き下がってくれた。

平静を装いながら、父も母も姉も、そして、私も深く心を痛めていた。

(それにしても、三度の食事はどうしているのだろう。寝るところは？ お風呂は？)

家族の皆、兄から便りがあることを念じ続けた。しかし、衣替えの六月が過ぎて本格的な夏到来となっても、兄の行方はようとして掴<sup>つか</sup>めないままだった。

## 父性のスケッチ 2

兄のことは我々家族の心で重く暗い闇となって深く沈んでいたものの、警察に任すしか手がなかった。父は「騒ぐものではない」と、あたふたする我々を戒めた。

「届けを出しているし、修平の意思で家出したんだから経過を見守るしかない」

母は辛がって、「そうは言っても」と泣きの涙で日々を過ごしていた。

「修学旅行は別として、家族旅行で九州・博多のどんたく祭りと太宰府天満宮に行った程度なんですよ。遠距離に一度も出掛けたことのない修平が一体、どこに行くあてがあるのでしょうか。どうして『お母さん、ここにいるから心配しないで』と電話一つ寄越さないのかしら。事件に巻き込まれて監禁されているのではないかしら、まさか死んではないわよね」

母は兄の写真を神棚に祭り、「一日も早く、消息が分かりますように」と祈り続けていた。

私は大学に戻っていたから現場を見なかったわけだが、タウンページを見て探偵事務所に電話しようとした母を父にしては珍しく大きな声で叱ったという。

「手紙を置いて出たということは、自分の意思で家出したわけだ。こんなとき、親が右往左往するものではない」

「だけど、手をこまねいてはいられませんよ」

「民間の調査機関など、当てに出来るはずがない。ともかく、騒ぎを大きくしては駄目だ。そんなことをしたら、修平を帰りにくくしてしまう」

父は「待つ側としては、修平が帰りやすくしてやっていたらいいんだ。今は待つしかない」と言い続け、母としてはそれがもどかしくてならないのだった。

「お父さんなりに考えているのよ」

姉によると、父はいつもどおりに丁寧に患者を診ていたし、夜間の急患にも素早く対応していた。兄が出奔する前と変わりのない日々だが、電話の音にはひどく敏感になっているとのことだった。

父に諭されて探偵事務所には電話しなかった母だが、父には内緒で「当たる」と評判の、三ノ宮の女占い師のところは何回も足を運んでは一喜一憂しているという話だった。

「『南方にいる』『今は東方にいる』と行くたびに違うことを言われるようだけど、『元気ですよ。死んではいないですよ』という言葉が聞きたくて、お母さんは定期的に三ノ宮に行ってるのよ」

神戸市中央区にある三ノ宮は、我が家から電車を三つ乗り換えないといけなかった。

「往復三時間は掛かるでしょうに」

姉は「母心よ」と溜め息をついた。兄のたいして広くない交友関係にそれとなく電話しても「山之内くんは元気ですか。医大は決まったのですか」と、逆に尋ねられる始末だという。

どうしようもなかった。

「俊太郎がいてくれて助かるのよ。沈痛な空気が和らぐから」

俊太郎の成長過程を話すときの姉の声音は、いたってマイルドに変貌した。しゃきしゃきと、いささか早口で畳み込むような話し方を  
する姉が幼い俊太郎の話になると、トーンが違ってくるのだった。

(母親になったら、誰もこんなソフトに変貌するのだろうか)

姉からの電話のたび、私は首を傾けて姉の声音に耳を澄ます。姉の変貌は母性から来ている。不思議なものだ、と感じる。私もいつかこんな声音に変わるのだろうか。

「近ごろのお姉さん、全体的に優しくなったよね。自分でも感じない？」

「まあ、急に何を言うのかと思ったら」

姉は電話口でクスクス笑った。

「あっという間に結婚してあっという間に離婚して、私が一児の母だなんてねえ。人生、誰にも予測は付かないってことね」

「角が取れてまあるくなって……人間、万事塞翁<sup>さいおう</sup>が馬<sup>うま</sup>ってことかしらね」

「塞翁が馬、か。理香もたまにはいいことを言う。災いが吉と返ってくるように、修平のことも信じて待とうね」

姉も私も、時間さえ経てば兄がひょっこり戻るものと信じていた。

すっかり母と顔見知りになった初老の係官は「浪人生をかかえる家庭はどこも大変ですなあ」と同情は示してくれたものの、事件性がないので積極的に動きようがないと言っているらしかった。

姉から電話がかかるたび、私は「何か分かった？」と尋ねた。

「特に無い」

答えはいつも同じだった。

「修平が遺体にでもなって発見されたら、警察だって本腰を入れてくれるでしょう」

「何を言うの、縁起でもない」

この日、姉は「それでも言わなきゃ、このウサは晴れないわよ。大物代議士や政府高官の子供なら、もっと違う扱いだと思わ」と突然、電話の向こうで泣き出した。

「どうしたの、お姉さん」

小さい時からめったに泣くことのない姉だった。

「お姉さんが泣くなんて、何があったの」

「私はね、一家の長女として、そして修平の姉として何もしてやれないことが残念なの」

しばらく沈黙した後、姉は「幸生さんは官僚の娘さんとの見合い話が進んでいるらしい」と口に出した。

「警視庁のトップがその人の伯父さんらしいわ。警視庁に顔が利く人がいたら、修平のことも県の本部長に頼んでもらえたかもね」

アッと思った。もごもご口ごもる私をよそに、姉は「この離婚は私が決めたことだしね」と私の答えを待たず、電話をプツンと切った。

兄のことはともかく、憧れの京都という街で過ごす学生生活は愉快で楽しいものだった。時間があると、私は仲良しのクラスメイト<sup>あまみや</sup>雨宮

<sup>ようこ</sup>庸子と連れ立って京都をあちこち散策した。

実家が島根の海産物問屋だという庸子は穏やかな性格で、風貌も日本人形のような愛らしさだった。薬科大学に通っている二つ違いのお姉さんと二人で市役所近くの3LDKの洒落た新築分譲マンションに住んでいた。父親が「いずれ、娘達が卒業したら賃貸に出してもいいだろう」という考えで購入した物件だそうで、どの方向に向かうにも利便性がよかった。

「理香さんちも買ってあげばいいのに」

「四年間の学生生活だから、私は賃貸でいいの。うちは、庸子さんのお家みたいなリッチじゃないの」

庸子は「お医者さんの家なのに？」といかにも不思議そうな顔をした。

「大病院ならいざ知らず、我が家はごく普通の家なの。普通の一般家庭なのよ」

言ってから、心の中で「今は、普通じゃない事態だけど」とつぶやいた。苦労知らずの庸子に、兄の話をしたらどんな顔をするだろうと思った。

「姉妹二人で3LDKというのは広すぎるのだけど、しょっちゅう母がおばあちゃんとケンカして京都に出てくるの。お父さんが一人息子のせいもあるのだろうけど、『嫁・姑』というものは所詮、<sup>しよせん</sup>相容れないものなんだなって母の延々と続く愚痴を聞いてると痛感するわよ」

庸子から「島根からまた母が出てきてるの。『私はその内、あのお姑に殺されます』なんてブツクサ言って京都の街を買い物して歩きまわっているわ。今度は何日、こっちにいるつもりかしらねえ」などと聞かされる度、私は姉と高山隆子の<sup>あつれき</sup>軋轢を思い出さないわけにはいかなかった。

季節は夏真っ盛りになっていた。深夜の午前二時、姉から電話があった。

「幸生さんが心不全で急死したんだって」

知らせてきた姉の声はさすがにショックで震えていた。

「お風呂から出て直後、『息苦しい』って言うなりバタッと倒れてそのままだったそうなのよ」

「まあ」

死んだなんて……突然のことで言葉が続かなかった。頼りないところもあったけれど、気のよい人だった。姉の別れた夫には違いなかったが、好きなタイプか嫌いなタイプかと聞かれたら私は迷わず「好きなタイプ」と答えるだろう。母親が介入しなかったなら、姉のお尻にほどよく敷かれて気のいい青年実業家として<sup>のんき</sup>暢気に暮していたはずではなかったのか、と思った。

姉と離婚してからの彼はマンションの一人住まいをやめて、再び芦屋の親元に戻っていた。縁談が進んでいたにしても、彼が再婚したとは聞いていなかった。

「夜中に電話が鳴るから、お父さんやお母さんが目を覚まさないように急いで出たら高山のお<sup>とう</sup>義父さんだったわ。お義父さんは『いろいろ思うこともあろうけれど、明後日の葬儀の席には美和さんにも俊太郎を連れて親族席に座ってほしい』っ

て泣き声で言ったわ。それで、真っ先に理香に相談としようと、今こうして電話したの。明日の朝、お父さんとお母さんには話すわ。どうしたらいいと思う？」

姉は別れた夫の葬式に行くべきかどうしようかと頭をかかえていた。

「俊太郎を列席させたくてそう言ったんでしょうけど、私も俊太郎も既に高山姓じゃないし。今さらねえ……」

「隆子さんはどう言ってるの？ 来てほしいって？」

「私が俊太郎を連れて家を出た直後から幸生さんの再婚相手を目の色変えて探すような非常識な人だったけど、救急隊員が到着して『既に死んでいます』と幸生さんの死を告げられた途端、『ああっ』って叫んでその場に気絶したそうよ。お義父さんが懇意こんいにしている新神戸駅近くの総合病院に入院させたものの、衝撃が強すぎて起き上がれない状態なんですって。面会謝絶のまま、点滴で栄養を摂っている具合らしいわ。お義父さんも『あれはあれで苦しんでいるのだから』って電話口で男泣きしていた……」

私は、両家の食事会のとときの権高な隆子の顔を頭に思い浮かべた。気位の高い冷たい雰囲気の人だったが、最愛の息子の、しかも跡取り息子の突然死とあっては、さすがの隆子も床から起き上がれないほどの打撃を受けたことは想像かたに難くなかった。

確執深くかつては恨みに思っていたはずの隆子のことを、姉は「逆縁さかえんを見るくらい、非情な話はないわねえ」と心から哀れんだ。

結局、姉は高山家で用意してくれた親族席には座らなかった。服装も、近しい者が着る和服にはしなかった。黒の洋服姿で一般会葬者の列に並んで、沈痛な面持ちで俊太郎と焼香を済ませた。

「お手々を合わせなさい」

姉に促され、きょとんとしながら手を合わせる俊太郎の姿が哀れだった。喪主の席に視線を向けたが、肩を落とした父親は目を閉じたままで悲しみに耐えていた。母親の隆子の姿は見えなかった。

私の夏休みも終わりに近づいた八月末、姉あての一通の茶封筒が我が家に届けられた。

丁度、実家に帰ったところで、郵便配達人から私が受け取った。

封筒に印刷された差出人の欄を見ると、神戸家庭裁判所N支部となっていた。

「なに、これ？ N市役所の横にある裁判所じゃないの」

母も困惑げに封筒の文字を見つめた。

「家庭裁判所が一体、美和に何の用があるのかしら」

開封した母は「何と身勝手な」と言うなり、ヘナヘナとその場に座り込んでしまった。

「何なの？」

「呼び出し状よ」

母は手紙を私に見せた。高山家代理人根津司郎の名前で「高山幸生の遺児・俊太郎を高山家で引き取りたい」<sup>むね</sup>旨の調停を起こされていたことを知った。

「美和のほうは後回しでいいわ。今伝えて、授業に障りがあるってはいけないもの。それより、先にお父さんに連絡しましょう」

言いかけて「ああ、そんなことより大事なことがあったわ」と、母はポンと一つ手を叩いた。

「まずは弁護士探しをしなきゃ。美和の離婚のときも弁護士なんか頼まなかったというのに……。こうしちゃいけない」

母は電光石火の動きをした。誰に聞いていたのか「こういう場合は、地元の弁護士会に問い合わせるのが一番なのよ」と言って、母は電話番号案内・一〇四に電話した。そして、弁護士会の番号を聞いて電話して事務長を呼び出すと、あらましを話して弁護士を紹介してほしいと依頼した。応対した事務長は親切な人で、我が家に近い住所の弁護士の名前を数人あげて「どの先生に依頼するかは、直接会って決めてください。相性がありますから」とアドバイスした。

母は複数の弁護士名を書きとめて、ようやくひと安堵<sup>あんど</sup>したようだった。

「姑の隆子さんが俊太郎を引き取りたくて何度も根津弁護士を使って圧力をかけてきたくせに、それでも取れないとなって悔し紛れにあちこちで『俊太郎は縁の無かった孫と思って、すんなりと親権も養育権もすべて母方に渡しましたの。もはや、私たちに未練はないです』と言いまわっていた話も美和から聞いているわ。今さら、こんな調停をよくも起こせるもんだわ。厚かましい」

一息ついた途端、怒りが腹の底から込み上げてきた様子だった。

「あれだけ高慢な姑のいる家では再婚相手がすぐ決まるということもなく、あれこれ選り好みしている内に幸生さんは死んじゃうし、隆子さんも天罰だと思ひ知るがいいのよ」

「家の跡継ぎとしてどうしても幸生さんの直系の俊太郎を欲しくなったのね」

「俊太郎は絶対に渡さない。今になって、なにを言うのよ」

母は昂然と胸を張った。その時、昼寝していた俊太郎がちょうど目を覚まし、隣の部屋から「バーバ」と母を呼ぶ声がした。

「あっ、俊ちゃんが起きた」

母の目がパッと輝いた。俊太郎は誰より母になつき、百パーセント「バーバっ子」になっていた。

「はいはい。バーバはいつだって俊ちゃんのそばにいますからね」

母は目じりを下げて、俊太郎の元へと廊下を小走りして急いだ。肩をそびやかすような走り方になっていた。母の背中から「敢然<sup>かんぜん</sup>と戦うぞ」という強い気配が伝わってきた。誰より俊太郎を可愛がっている母は鬼と化してでも、高山家に一人孫を渡すことはしないだろう。姉も父も当然、渡すはずが無い。

(縁が切れたはずの両家なのに、揉<sup>も</sup>め事は長く続きそうだ……。次から次へと、どうしてこんなことが起きるのだろう。お兄さんの行方もまだ分かっていないのに)

占いでいうところの、「天中殺」「大殺界」なのだろうか。深い憂いの溜め息が、自然に口から出ている。

### 父性のスケッチ 3

調停は、九月から二カ月程度の間隔を置いて神戸家庭裁判所の一室で開かれることとなった。

代理人に立てた岩佐不二男<sup>いわさふじお</sup>弁護士は中堅世代で、学部は違っても同じ神戸大学の卒業ということもあって、姉にとっても親切だった。

「小さな街で、裁判所に出入りしている姿を人に見られて『山之内さん、何があったの?』と詮索<sup>せんさく</sup>されたくない」

渋る姉に、彼は「では、神戸家庭裁判所へ移送の手続きをしましょうか」とアドバイスした。本来、調停をおこされた側（相手方）の住居地で開かれるのが普通らしいが、移送という手続きをすれば裁判所を変更することができるという。

「もちろん申し立て人側の同意が必要ですが、根津弁護士が神戸市に事務所を構えている人ですから兵庫区にある家庭裁判所で調停の場を持つことに反対しないだろうと思います。N市から神戸市まで往復の時間を考えた時、ちょっとくたびれますが、それでもいいですか」「是非、そうして下さい。遠いほうが人目に立たなくて済みますから」

「そうですか。では、そのように手続きをします。調停は裁判とは違いますから、弁護士を代理人に立てて出てこない人も多いです。実際それでも構わないのですが、男女各一名の調停委員と審判官により理解してもらおうよう、是非とも美和さんも僕と一緒に足を運んでください」

家事調停では裁判官が「審判官」となって調停に立ち会うということ、私たちは初めて知った。むろん、姉が裁判所に足を向けることなど初めてのことだった。

「頭にかかる火の粉は払わないとね」

毎回、姉はげんなりした口調で電話してきて「一山超えたら、また一山。しんどいわ」と私に訴えた。

「順に目の前の問題から片付けていたら、最後は安心して到達できるというものよ」

私が「私も一緒に行こうか。控え室で待っているわ」と言うのを、姉は断った。

「私はいつだってやり抜けてきた。この山も一人で乗り切っていく。それよりも、お父さんとお母さんが心配。修平のことで心を痛めているのに、これ以上の負荷をせおわせたくない」

「そうね……お兄さん、どうしているのかしら」

兄の消息はいまだ判明しないまま、時間だけが過ぎていた。

「根津弁護士とは前に会っていたけど、あれほどゲスだとは思わなかったわ」

姉が憤懣<sup>ふんまん</sup>やるかたない声で電話してきた。第一回、第二回と調停が終わり、季節は木枯らしの季節に入ろうとしていた。

「調停不調で終了してくれて結構です。両者合意は不可能ですから、年内で打ち切ってください」

岩佐弁護士が言っても、根津は引き下がろうとしないで「最低でも五回は調停を開いてほしい。そうしないと、依頼人への顔が立たない」と調停委員に手を合わせているという。

しかも、根津がこともあろうに調停委員に個々に手を回して「子供を渡せば、美和さんへ渡る礼金の額もはずんでもらえるはずだ、と言ってくれ」と頼んでいたことを知った姉は激怒した。

「亡くなった幸生さんは大学を出て何年も経っておらず、高山幸生名義のものは皆無といっても過言ではなかったから、幸生さんの死に際して遺児・俊太郎君が相続したものは微々たるものだった。それにしても、幸生さんの唯一の子供としての俊太郎君が将来、高山忠政さんと隆子さんからの莫大な財産を代襲<sup>だいしゅう</sup>相続されるのは間違いないことだ。今のうちに、高山家に渡さないと、遺言によって相続人から

はずされる<sup>きく</sup>危惧がある」

事あるごとに、根津はそのように調停委員に向かって「なだめたりすかしたりして、子供を高山家に渡すように尽力してくれ」と言うらしかった。調停というシステムでは相手方と申立人は同席しないことになっているから、姉と岩佐弁護士は根津が調停室で勝手なことを喋っている間じゅう控え室で延々と待たされる羽目になった。

調停が終って姉から報告を聞くたび、私までが実に不愉快な気分させられた。

「我々が金に目のくらむ人間だと思っているのか」

父も母も、姉からの報告を受けて気を悪くしたのは当然のことだ。

「田舎医者でも医者は医者。娘とその子供くらい、私の力で充分養えます。生前の幸生くんには父親の義務を果たしてもらおう為に毎月きちんと養育費を送ってもらっていましたが、全部手付かずで銀行に積み立ててあります」

父は岩佐弁護士通じ、高山忠政・隆子あてに直接、意見書を送付した。それを知った根津は、「僕という代理人の頭越しに手紙を出されては困る」と岩佐弁護士に怒りの電話をかけてきた。

「子供の意思がありますから、取り立てて今、遺留分放棄または相続放棄は致しませんが、高山家に引き取られて贅沢さんまいに育つよりも、質実な家庭で母親やその家族と共に育つ俊太郎君は、父方の財産を当てにするような人間にはならないと思いますよ」  
岩佐弁護士の言葉に、根津は返事をしなかったという。

この日、京都の私に姉からの電話があったとき、たまたま庸子が遊びに来ていた。  
姉と私のやり取りを聞くともなく聞いていた庸子が、電話を切った私に「根津司郎って、もしかして島根出身じゃない？ 親は漁師さん？」と尋ねた。  
「出身がどこかなんて、知るもんですか。漁師の息子かどうかは知らないけれど、あまり品の良い顔ではなかったわね。貧しい家の出だと、姉の元姑が言っていた話は漏れ聞いているけれど」  
姉の短い結婚と離婚について、その後の義兄の急死などなど、私は包み隠さず庸子に話した（兄の出奔については語らなかった）。庸子は「大変だったのね」と相槌打って聞いていたが、やはり根津司郎のことが気になるようだった。

「私の家は島根のA市で、戦前から真砂屋という屋号の海産物問屋をやっているって前に話したでしょ。物によっては仲買を通さずに漁師さんから直接買い付けることもあるのだけど、うちに昔から出入りしていた戸田さんという漁師さんが『末の息子が自分は弁護士になるのが夢だと言って、奨学金をもらって大学まで出たのはいいのだけど、なかなか司法試験が合格しないので仕方なく中学で歴史教師をしていたところ、遠縁の者が大阪で高利貸しをしている根津という人が一人娘の婿養子になるなら司法試験に合格するまで何年でも生活費の援助をしましょうと言っていると知らせてきて、高利貸しの婿養子もどうかと俺らは反対したんやけど、弁護士になりたい一心の息子は勝手に婿養子に行っちゃいましたの』って、父に悲しげに話していたのを子供心に覚えているのよ。あの時『シローが、シローが』って言ったのを聞いて、姉が『我が家の愛犬シロと同じ名前ね』と笑っていたのを記憶しているから間違いないと思うの」  
庸子は「根津さんって、こんな感じじゃない？」と、見たかのように風貌について話した。  
「あら、どうして人相まで分かるの？」  
「だって、『シローは、子供ん中で一番わしに似とります。じゃから、こんまい時分からシローが一等、可愛ゆうてならんのです』って戸田さんが言ったもの」

姉の離婚が正式に成立する前、根津は『これは調停外調停です』と言って何度となく足を運んできた。そして、俊太郎を婚家に渡すよう（隆子から言い含められたに違いない）法律用語を交えながらぐどぐど話して帰っていった。その時の根津の顔を私は見てしっかり覚えていた。まさに、庸子のいう人物だと確信した。

「分厚い唇に狡猾<sup>こうかつ</sup>そうな目付きの、下品そのものといった顔の男だったわよ。いくら個人的なことを頼むとしてもあんな下品な弁護士を使わなくともねえって思ったものよ。生まれつきの美醜はともかく、四十年も五十年も生きてきたら顔にその人の品性が表れるというじゃない？ 根津の場合はまさしく品性の卑しさが顔に出ているケースね」

「私ね、その人と堀川のX病院で何回か会ってるのよ」

あまりの意外性に、私は目を丸くした。庸子の話によると、庸子の姉・郁子が夏からこっち潰瘍性大腸炎で入院していて根津の父親と同じ病室にいるということだった。

「同室になってだいぶしてから戸田さんがうちに出入りしていたあの戸田さんと気がついたわけだけど、取り立てて私も姉も実家の話をしていないから、戸田さんも真砂屋の娘だとは夢にも思っていないみたい。雑談の際に、『末の息子は神戸に住んどります』と話しても『弁護士をしている』とは口にしたことはないわ」

庸子は「口止めされているのじゃないかな」と首をかしげた。

「姉の病気は神経質な人がかかる病気らしいのよ。姉って、図太いようで気が小さいところがあるから。国家試験に無事にうかるかと、今から気を揉んでいるのよ」

「知らなかったわ。お見舞いもしないでご免なさい」

「心配しないで、病状自体はたいしたことはないの。ただ、親元から離れているから大事を取って入院しただけのことなんだから。島根の家の近くで外科医院を開業している人が修行時代にここの病院に勤務していた関係で、紹介してもらったの。民間病院だけど、施設が充実していてとても評判がいいのよ」

二人部屋の隣のベッドに根津司郎の父親が入院していて、日曜のたびに父親の見舞いに来ているという話だった。

「戸田さんは姉に『五人いる息子は末のせがれ以外、みんな島根で漁師をしとります』って話したそうだから、今までの話を総合して考えると、経済的に一番ゆとりのあるのが高利貸しの婿養子に入って弁護士になった根津でしょ。だから、彼が島根の父親をこっちに引き取ったんだと思うわ。それとね、姉が言うには『戸田さんと私は同じ病気ということになっているけど、出される薬も違うし、ここのところ急激に痩せてきているから、ちょっと病名が違うんじゃないかなあ』って」

思いがけない巡り合わせだった。

「でも、神戸市内で法律事務所を開いているのに、どうして、神戸の病院じゃないのかしら」

「推測だけど、根津が入り婿だから奥さんの親に遠慮があったのと、消化器系の権威と呼ばれるK先生が京大を退官して名誉医長として招かれているからじゃないかしら。K先生は院長と学生時代から親友だそうで『京大名誉教授に来てもらったら、箔が付く』って、内定

していた労災病院の院長給与の二倍近く払う約束で招聘したってのもっぱらの噂よ。K先生の診察日は、早朝から予約を入れようと詰め掛ける患者さんで一杯なんだって」

「ふうん、そうなの。全然、知らなかった」

「姉と同室になってから一度たりとも根津弁護士の奥さんや高利貸しをしているという親がお見舞いに来たことはないって。完全看護の病院で衣類も全部支給だから、洗濯物などの心配は無いのだけだね。おそらく、根津の一存で引き取って奥さんには内緒にしているんじゃないのなって思うのよ」

「戸田さんって人、本当はガンなの？」

「姉は『腸のガンじゃないかしらね』って言ってる。もちろん、推測の域を出ない話だけど」

「どんな人？」

「姉のお見舞いに行ったときに二言か三言、ちょこっと話すだけだけど、素朴な好々爺こうこうやって感じよ。太陽と潮風にさらされて顔は赤銅色しゃくどういろで

皺しわだらけだけだね」

へええっと思った。

日曜になると父親を見舞いにやってくるという根津を観察しようと思立ち、庸子に頼んでみた。

「私、お姉さんのお見舞いに行っていていいかしら。と言うより、父親を見舞っている根津を見てみたいのだけど」

「姉はもう回復期にはいっているからお見舞いなんて必要ないのだけど、そういう事情なら、姉に話してみるわ」

「是非、一緒に行かせて」

高山隆子から「重宝な弁護士」と揶揄やゆされる根津の人となりを知りたかった。

## 父性のスケッチ 4

私が庸子の姉郁子<sup>いくこ</sup>の見舞いに出掛けたのは、十二月に入った最初の日曜の昼下がりだった。

この日は早朝からちらちら小雪が舞っており、気が重かった……。気が重いという理由は、むろん郁子<sup>いくこ</sup>の見舞いのせいではない、この前の日になって兄の居場所と状態が警察から知らせてきたと姉から電話連絡があった。

死んではいなかったものの、嬉しい知らせではなかった。ショックのあまり、父と母は伏せてしまったという。

出奔して半年、兄はローマ近郊の無人の別荘の敷地内で意識不明のまま発見された。手に日本国籍のパスポートが握らされていたのみで、他に何一つ所持品はなかった。

全身を殴打され、肋骨は折れて肺に突き刺さり、枯芝の上に仰向けになっていたのを、別荘管理人が見回りに来て発見した。暴力を受けて服装は乱れていたものの、着ている黒いニット・セーターもコーデュロイのパンツも超一流ブランドのものだった。

「冬の間はオーナーはいらっしゃいませんが、私は管理を任された者として毎週末には必ず見回っています。分厚い鉄の門扉<sup>もんび</sup>がこじ開けられた形跡があるので泥棒が侵入したかと押っ取り刀で庭に回ってみたら、人が倒れているので仰天した」

親の代から別荘の管理を任されている初老の管理人は、「プロでないと、この頑丈な門扉を素人では開けることは不可能だ」と断言した。イタリアの警察は、管理人の「先週の見回りのときは異常はなかった」という話と兄の衰弱度からはかって発見の二日ないし三日以内の事件と断定した。

別荘の持ち主は貴族の称号を持つモーリスさんという宝石商一族の老婦人で、「もう、あの別荘に行きたくない。手放したい」と非常に怖気づいているという。

「殺すつもりがあったにせよ、半死半生の目にあわせるのが目的だったにせよ、加害者はこの一件を身元不明の事件で終わらせるつもりはなかったのでしょうか。だからこそ、パスポートを手を持たせ、週末になると必ず管理人が見回っている私の別荘を遺棄の場所を選んだのよ」

気味悪がる気持ちも当然だろう。救急隊員は「あと数日発見が遅れていたら、凍死したでしょう」と言った。発見された時の兄は、虫の息で脈も定かに取れなかったらしい。しかし、生き運があったのだろう、現在、「一命は取りとめることができます」という現地医師の診断を得ていた。

「ローマって、あのイタリアの？」

あまりの意外さに、「イタリア？ イタリア？」と二度も繰り返してしまった。

「そうよ。お父さんもお母さんも非常に驚いたし、状態が状態だし、生きて発見されたといっても今後のことは分からない有り様なのよ」  
家族の誰も、異国での発見など思いもよらない話だった。

「どうして外国なんかに行ったのかしら。パスポートはいつ取ったのかしら。誰と一緒にだったのかしら」

矢先早に質問が口からほとぼしる私に、姉は「何かも霧の中よ」と答えた。

「パスポートを持っている私が先に明日、イタリアに飛ぶことにしたの。こういうケースだから、お母さんのパスポートも早く出してくれるそうだけど。お父さんは病院があるから家で待つって」

「患者さんのこともあるだろうけれど、男親のお父さんが行くべきじゃないの」

「そうは言ってもね、お父さんが駆けつけたところで状態は変わらないし。休診の札を出すと何事があったかと世間の好奇の餌食<sup>えじき</sup>になるって、そのことも心配しているの」

「そんな、世間体なんか……」

「お父さんが『好奇の餌食になる』と言っているのは、私たちのことじゃないわ。修平のことを指しているの。修平がどうして異国で大怪我を負わされて発見されたか、世間に広がったならば、皆が憶測であることないこといい加減な噂を広げるでしょ。それを、お父さんは心配しているのよ。ともかく、意識が戻っていない当人からは何も聞けないんだし、お父さんが行こうと誰が行こうと変わらないの。呼吸・脈拍が落ち着いているという段階なんだから」

姉は冷静だった。

「今までに分かったことを話すから、気を鎮めて聞いてちょうだい。私が話し終わるまで口をはさまないでね」

前置きして、姉は次のように淡々と語った。

平成十六年五月、修平は高校二年時のクラスメイトで美大に進んだ友人を頼って上京した。どれくらい東京で気晴らしするつもりだったのか、その辺のところは今となっては分からない話だった。

修平が高校時代、この友人と親しい仲と認知していなかった母は、名を警察から告げられて「知っていますか」と聞かれた時、「名前は記憶にあります、修平はどうしてこの人を訪ねたのでしょうか？」と怪訝な顔<sup>けげん</sup>で逆に問い返した。この友人は地元の中学の美術教師の息子で（頭文字Wとしておこう）、絵が非常に上手だった。彼は父親と同じ美術の先生になるため、高校を卒業すると都内の美術大学へと進んだ。

Wは、街を歩けば皆が「芸能人みたい」と足を止めて振り返るほどハンサムな青年だった。にぎやかなことが大好きで地元のアマチュア劇団に参加して芝居をしたり歌を歌ったりしていたが、田舎にいたときは厳格な父親の下で羽目を外すことはなかった。しかし、親元を離れた途端、タガがはずれたかのように享樂的な性格に火がついた。

上京して一年もしないうちに、Wは誰の誘いか新宿のホストクラブに籍を置くようになった。ホストという仕事が性に合っていたのだろう、めきめき頭角を表して「有閑マダムのアイドル」と呼ばれるようになるのに時間はかからなかったという。

まじめ一徹の父親は、Wの生活状況を知って激怒した。

「ジゴロに成り下がって、あれはもはや私の息子ではない」

二度と故郷に顔を出すなと父親に宣告されたWの自堕落な生活ぶりは同級生達の間ではかなり広まっていたが、浪人中の修平の耳には届いていなかった。クラス会に出席していなかったせいかも知れない。親からの送金をストップされても、Wは生活に困ることはなかった。彼の周囲には湯水のごとく金品を貢いでくれる女がトラックに掃いて捨てるほど存在していたからだ。

こういうジゴロ生活のWのもとに、何も知らない修平が田舎からやってきた。彼は、おとなしい修平をそそのかして自分の染まった道に引きずり込もうとしたらしかった（これは、後に警察から聞かされた話である）。

「疲れて、生き方を模索しているようだった」

Wが語った言葉。

「夏の終わる頃、修平は黙って姿を消した。ほどなくして、俺の何人かいるパトロンの中でも最も裕福な辰野美弥子<sup>たつのみやこ</sup>と修平がイタリアに渡ったということを知った。パスポートを手配したのも美弥子だと仲間から聞いた」

彼が警察に呼ばれて話した内容は以下のとおり。

「辰野美弥子ってね、<sup>ごうぞう</sup>剛三さんっていう旦那がちょっと面倒な人なんですよ。貿易商という肩書きはあるけれど、実態がはっきりしないみたいでさ。かなりの年齢差でね。三十幾つかの女優のSそっくりの美貌の美弥子さんと、還暦近い鬼瓦みたいなご面相の辰野さんの組み合わせが前々から変だなと思ってたら、『材木屋をしていた親の借金のカタに<sup>ひとみごくう</sup>人身御供で辰野のところに行った人だとよ。闇金融で荒稼ぎしているって噂もあるし、かなり嫉妬深い旦那らしいぜ』と仲間も聞きつけてくるしで。修平とのことで、俺としては美弥子さんと円満に切れてよかったと思ったんですよね。闇の世界は底知れずで怖いですから」

円満に切れてよかったと言うわりには、彼は未練たらたらで「金離れは良かった人ですから、フェラーリでも何でも与えてくれましたよ。あのフェラーリ、今は誰が乗っているのかなあ」とかつて与えられた品物のリストをつらつらと示したそうである。フェラーリから始まってロレックスの<sup>きんむく</sup>金無垢の時計・白馬の別荘・ミンクのジャケット等々……たくさん書き記されていたが、担当した初老刑事は「もらったというより、自由に使わせる権利を与えられていただけらしい。女もしっかりしていますなあ」と苦笑していたそう。

「調べでは、辰野美弥子は修平が発見される二日前に、迎えに来た辰野剛三の部下と帰国しているのよ」

「どういうこと？」

「推測の域を出ないけれど、辰野剛三という人が闇の世界に顔が利くならば警察以上に早く行方を掴めたことでしょう。剛三という人が手下を使って修平を袋だたきにしたのよ。そうでないなら、わざと修平の手に身元の分かるパスポートを持たせたりしないはずだもの」

私は薄暗いものを感じて、全身に鳥肌が立った。

「辰野美弥子って人、今はどうしているの」

「それが……」

姉は言葉を濁した。辰野剛三は「妻から『思い立ってローマに来たが、あれもこれも買っていたら帰りの旅費まで使ってしまった。送金して欲しい』と連絡があって初めて、（そうか、ローマに買い物に行っていたのか）と分かった次第で、修平君について私は何も関与していません。妻も『ローマに到着してすぐに別れたから知らない』と言っています。言葉も分からないイタリアで、物取りにあったのじゃないですか。気の毒に」とうそぶいているという。

美弥子のほうもどのように言い含められたか、警察の事情聴取で「ローマについて、すぐに分かれたから修平という若者について一切知らない。『ローマに行くなら、是非とも同行させてほしい』と頼まれただけ」と今もって知らぬ存ぜぬと言い張っている。

「パスポート申請の仕方分からないというから全部こちらで手配しましたが、あくまで私の親切心からですわ」

渡欧費や修平の身に着けていた高価な衣服代を全部出してやったのではないかと聞かれても、「ジャニーズ事務所の男の子みたいな可愛いお顔の修平君だから、イタリア女が貢いであげたのでしょう」とシラを切り通し、証人がいない以上どうにも追求が出来ないらしかった。

「裏ルートに通じている辰野美弥子にうまく誘惑されたのよ……宿泊ホテルもツイン部屋だというし。だけど、真相を知ろうにも修平がああではどうしようもない。辰野美弥子はいくら警察が詰問しても、『おなかですいた時に私を訪ねてきました程度で、ローマの街で何をしていたか知りません。ホテルについては、私はいつもツインルームをシングル・ユースしていますので』ととぼけるらしいわ。剛三の手下によって見せしめにやられたに違いないのに……」

姉は喉<sup>のど</sup>を絞るようにすすり泣いた。

「医学部に行きたくないなら、はっきり意思表示すべきだったのよ。話せば分かるお父さんなのに。気が弱いのよ」

「違うわ。心優しいお兄さんだから、『お父さんの築いた医院を継承するのが長男の役目』と思い込んだまま来てしまったのよ」

姉は「思い込みで一人悩んで……。馬鹿な子よ」とつぶやいた。

「俊太郎のこともあるし、採用されたばかりで残念だけど、英語学校の講師を辞めることにするわ」

「辞めなくっても」という私に、姉はきっぱり「仕方ない選択よ」と答えた。

「体の傷だけじゃなくて脳挫傷<sup>のうざしゅう</sup>もしているそうなの。現地の医者も修平がどのくらいまで正常に戻るか分からないと言っているそうだし、帰国できるほどに体力が回復したとしてもすぐには家には連れては戻れないでしょう。世間で噂が立たないように、まずは別の場所入院させて完治させないといけないのよ。ただ……完治できるかどうかは不明だけど」

姉は「しっかりガードしてやらないとね。私たち、家族なんだものね。頑張ろうね」と、鼓舞する言葉で締めくくった。

盆地の京都の冬は底冷えして寒いものと決まっているが、この日は特に冷え込みが強かった。容赦なく北風が顔を打ってくる。せつないまでに冷たい風。

(お兄さんはどういう状態で襲われたのだろうか)

きゃしゃな兄が屈強な男達に殴られている姿を想像するだけで、胸が圧縮されるような気分になった。涙がこぼれそうになるのを、私はグッとこらえた。昨日の今日なのだ。分かっていたら郁子の見舞いを先延ばししていただろうに。

こうした話は、いくら仲良しの庸子でもさすがに出来なかった。姉の離婚話より、もっと深刻な事件なのだ。

「島根も寒いけど、京都の寒さとはまた違うのよね。京都の寒さって、底から這い上がる寒さだわ」

庸子は私の内心の苛立ち・不安に気が付かないまま、とくとくと日本海側の寒さと盆地の寒さの違いを比較して話して聞かせた。私は心ここにあらずのまま、うんうんと相槌を打った。

私たちは×病院前でバスを降りると、正面から吹きくる強い風を避けるように、コートの襟を立ててうつむき加減に歩を進めた。病院の広い鉄門の横には分厚い防寒コートに身を包んだ年寄りの守衛が待ち構えていて、日曜だというのに「何科に行かれますか」と銘々にチェックを入れていた。

「大病院だから人の出入りが多くて、以前に泥棒が紛れ込んで盗難事件が発生して以来、守衛が休みの日も交替で番をしているのよ」

庸子は説明した。何回も来ていて顔を覚えられている庸子は「胃腸科ですね」と先に守衛に言われて、「ええ」と笑顔でゲートをくぐり抜けた。昼下がりでというのに、早くも日が陰り始めていた。

風が弱まったかなと思ったら、今度は白い雪片が天から舞い降りてきた。

「わあ、雪が降ってきたわ。積もるかしら」

歓声を上げる庸子の横で、私は手のひらを上にして小雪を受けてみた。

次々と舞い降りる雪片は、手のひらに留まるとすぐに解けてきれいな水滴になった。私には、これがひっそり流した兄の涙のように感じられた。

「こんにちは」

「ようこそ。初めまして」

どこもかしこも真っ白で統一された、明るくてきれいな病院だった。花柄のパジャマの郁子は二人部屋の出入り口側のベッドに横たわっていたが、私たちが入っていくと半身起きた。血行も良く、とても元気そうに見えた。

「じき、退院できるのよ」

「そうですってね。良かったですね」

私が用意した見舞いの花かごを渡すと、郁子は「有り難う」とニッコリ笑顔を向けた。笑うと両頬にえくぼが浮かんだ。市松人形いちまのよ  
うな顔立ちの庸子とよく似ていた。

「二人ともオーバーはその椅子の背にかけてね。庸子からあらましは聞いてある。今、例の人が来ている」

小声で言うと、郁子は白い仕切りカーテンを指差した。

「例の人、普段は事務所があるからでしょうね、日曜しか来てないわ。たいてい三時前に来て一時間ほど相手して四時前には帰ってるわ」

庸子が腕時計を見て、「あと二十分ほどで四時ね」と言った。私たちが羽織っていたコートを脱いでベッドの足元の椅子に重ねて置いたとき、郁子が「シッ」と人さし指を口元に当てた。

ぼそぼそと喋る根津の声が聞こえた。

「駄目だよ、いくら言っても。退院したところで、母ちゃんや兄ちゃんは父ちゃんの面倒を見れないんだよ」

「じゃけんど、父ちゃんは島根の海を見たいんだよ」

老人の、駄々をこねるしゃがれ声が響いてきた。

「この寒いのに、海なんか見てどうするんだよ」

「海はなあ、父ちゃんの活力の源なんじゃ。特に冬の日本海がええんじゃ、雄々しゅうてのう。父ちゃんは今頃から海を見て育ったんじゃもんなあ」

「漁から帰ったら酒ばかり飲んでっから肝臓を悪くしたんじゃないか。酒を飲んで煙草を山ほど吸って、不摂生するから病気になるんじゃ。どの兄ちゃんも子育てに金がかかるってよう、父ちゃんの面倒を見れないちゅうから仕方なく俺が引き取ってこの病院に入れてやったんじゃないか。『帰りたい、帰りたい』と騒いでいると、病院をたたき出されるぞ。ここは関西一と評判の偉い先生のいる病院なんじゃから、静かにしとけ」

「父ちゃんはこのう、いっぺん島根に帰りてえんだよ。帰って島根の海を見たいんだよ。この前、佐江子に電話したら『ええよ』って言うてくれたもんなあ」

「母ちゃんが何を言おうと構うことはない、半ボケになっとるがよ」

「ようもそんなこと、言うもんでねえ。親を半ボケじゃなんて」

ごほごほと老人が咳き込んだ。私たちは顔を見合わせた。

「戸田さん、お待たせしました。主治医の<sup>くさか</sup>日下先生の手が空きました。談話室のほうへいらして下さいとのことです」

若い看護師が呼びに来た。

「はい」

白の仕切りカーテンを引いて、根津が「すぐ行きます」と顔をこちらに向けた。

分厚い唇、度の強いメガネの奥の狡猾そうな目……、確かに根津弁護士だった。根津はチラッと隣りのベッドの見舞い客である私たちに視線を這わせた。

（覚えているかしら）

一瞬、目を伏せてしまった。が、応接間に通したときにお茶を運んだくらいではさすがに記憶に残っていないらしく、彼は乾いた声で「失礼」と断ると私と庸子の立ち位置の背後を通過して病室を出ていった。

## 父性のスケッチ 5

平成十七年立春。

兄の体力が回復し移動許可がおりたのでいつでも帰国できるという連絡が母から自宅に届いた。この日の来るのを見越して、父は受け入れ先を前以って探していたということだった。

「大阪南部にある個人病院らしいわ」

電話してきた姉は、小さく「精神科の」と付け加えた。

「いったん家には連れ戻らないの？」

「連れ戻ってもね……」

言葉を濁す姉の雰囲気から、兄の状態が一向に改善されていないことが察せられた。

あの時、知らせが入った翌日に姉がまず、いの一番にイタリアに飛んだ。姉は現地医師の説明を聞くまでもなく、兄の痛々しい姿を目の当たりにした瞬間、（傷が治っても、健常人には戻れまい）と悟った。医学知識のない姉の目にも事態の深刻さがはっきり見て取れたという。その後、パスポートの取れた母と入れ替わった。幼い俊太郎がいたので、姉がずっと兄に付いていることは出来なかった。第一、母のほうも「あの子のことは、私でないといけない」と言い張った。日本を離れてどこの国にも行ったこともない母が、である。

父の、「修平が好奇の餌食となることは極力回避せねばならない」という気持ちが強く働いて、私たち家族は対外的には普段どおりの日々を続けた。医院を手伝ってくれている看護師と事務の二名のスタッフにも、親戚にも、一言も今回の事件について話さなかった。

「修平が元気になった時のために」これが、家族の合言葉のようになっていた。

マスコミのほうは、父が地元選出の代議士の後援会長のホームドクター的役割を果たしていた関係で彼を通じて、この人から外に漏れないようにがちり抑えてもらった。新聞には「邦人、殴打<sup>おうた</sup>されて重傷で発見」と名前を伏せてごく小さく報道されただけで、周辺で兄のことだと分かった者はまずいなかったはずだ。

姉は姉で「母の体調が悪くて転地療養することになったので」と理由付けして、勤め始めたばかりの英会話学校を辞めた。事務局からは「お母さんの具合が悪いというのでは、仕方ないですね」と、とりたてて不審がられることはなかったらしい。

病院の特別室に泊まりっぱなしで他所に出歩くこともないとは言え、言葉も習慣も違う異国で二ヶ月も暮して母はさぞかし苦労したものだと思われた。しかし、母の手紙を見ると、泣き言は一行も書いてなかった。

「イタリア人が女と見たら口説くというのは本当です。私も、見知らぬおじさんから親しげに声を掛けられ『ノー、ノー』と逃げました。あとで考えたら、単に天候なり時候の挨拶した程度かもしれないと思いました」

「大きな病院ですから、地下にスーパーマーケット顔負けのフードショップが入っています。私は身振り手振りで病院の人たちと話しています。この年でボディ・ランゲージしているわけですから、周りのイタリア人も気を遣ってくれます。医者も看護師さんも、みんな親切です」

定期的に手紙を寄越したが「今日も元気です」という書き出しで、特に兄の病状に触れることはなかった。兄は身体的には一日一日回復していたものの、精神面では見通しが立たないままだった。イタリア警察も「ゆきずりの犯罪」として、早くから犯人逮捕を諦めているらしかった。母としても、書きようがなかったのだろう。

「充分にしてやりなさい。どうせ、修平の医大にかける費用として蓄えていたお金だから」

父は国際電話するたびに母にそのように伝え、まとまった金額を週明けになると送金していた。

兄は脳の前頭葉部分をひどく殴打された為に神経経路が切断された状態で、生きた<sup>しかばね</sup>屍になっていた。日本の警察を通じてイタリアから取り寄せたカルテを見て、兄が治る見込みがないことを我々以上に医師の父には分かったはずだ。黙ってカルテを机の引き出しにしまって、その後それについて語ろうとはしなかった。

「お父さんの白髪は急に増えたわ。お父さんにはもはや修平に送金してやることしか、なすすべが無いのでしょうか」

「治らないの？」

「分からないわよ、そんなこと。人間の世界に『絶対』ということはないでしょうし」

私は「そうね」と答えた。それしか、答えようがなかった。

二月、建国記念の日。父は医院の休める日を、兄の帰国日に指定した。後期試験も既に終了していた私もそのとき実家に戻っていたから、一家総出で成田経由で帰ってくる母と兄を出迎えに行くことにした。

私たちは関西空港と契約している業者に車を預けて、そのまま羽田に飛び、成田空港へと回った。兵庫県の我が家からだと伊丹空港のほうが近いのだが、何故に大阪府南部に位置する関西空港から飛んだかということ、兄を連れ戻ってすぐに入院手続きする病院が関西空港のほうに近かったからである。「車の預かり業者が出発口で待ち構えていて車を受け取ると、帰り時間に合わせて到着口の真ん前まで運んでくれるから、素早い対応ができる」と父は言った。

「極力、修平の無残な姿を人目にさらしたくない」

父の気持ちは私たち姉妹にもよく分かるのだった。

「そちらの日本航空のカウンターで、医院が休みの日に到着する便を探しなさい」

父から指示されて、母は「関西空港着の便が取れなかったから、成田に二月十一日、午前七時五十五分着の便になりました」と知らせてきた。帰国の日が決定するなり、父は自分の古いクラウンにカーナビを取り付けた。

「お父さんはね、修平の痛ましい姿を世間の人に見られたら回復した時に<sup>や</sup>擲<sup>ゆ</sup>されて可哀想だと思っているの。だから」

姉は、父がナビを付けた理由を説明した。

「関西空港に到着後すぐ、ナビを頼りに自分の運転で大阪南部のT町の病院に連れていくことにしているの」

「兵庫の家に戻らせないのね？」

「今の姿をさらしたくないのよ。お父さんは奇跡にかけているの。精神病院だけど、閉じ込めるだけの病院ではなくて症状にあわせてトレーニングしてくれるらしい。お父さんとしては、そこで励んだら何とか改善されるのではないかと期待を募らせているのよ。そして、治ったときに『あんな哀れな状態だった』と、人から修平に後ろ指を指させてはいけないからカバーしてやらないと……って言うの。お父さんったらね、これまでお正月以外に手を合わせたことのなかった神棚にしょっちゅう手を合わせているわ」

日頃の父からは想像もできないことだった。

「学生時代の友人が紹介してくれた<sup>こんごうさん</sup>金剛山近くの精神病院に直行するから。到着時間はいつでもいいといわれている」

私たち一家が関西空港に戻ったのが正午過ぎで、到着ゲートを出ると、社名をプリントした赤いジャンパーの民間駐車場の社員が父のクラウンを出口前まで運んで待機していた。

「サービスで洗車も済ませています」

「有り難う。世話になったね」

キーを受け取ると、父はすぐに我々を乗せて病院に向けて出発した。母が退院直前に現地のデパートでそろえたという白い厚手のセーターに黒ズボンというござっぱりした格好の兄は、遠目から見る限り特におかしくはなかった。しかし、近づいて、とろんとした目を見たとき、尋常ではないと悟った。

兄は、父や姉や私の顔を見ても表情を変えなかった。正確にいうと、表情そのものが兄の顔から消え失せていた。目を開いて瞬きを<sup>まばた</sup>していても、それは見ているのではない。機械的な動きに過ぎなかった。なんと痛ましい姿の兄……

(とても正視できない)

泣くまいと、奥歯をかみ締めた。

朝早くから飛行機に乗ってあちこち連れまわされて疲れきった俊太郎が姉に抱かれて寝入ってしまったのは良かったと、心底から思った。まだ何も分からない年齢とはいえ、俊太郎がでく人形のような兄を見てどんな表情をするか、密かに心配だった。

寝息を立てる俊太郎を抱いた姉が助手席に座り、母が「お母さんと理香の間に、修平が座ろうね」と言うと、兄は「ふん」とうなずいた。しかし、言葉の意味を解していないことは明らかだった。

父は黙々とハンドルを握った。

普段なら長距離トラックが多数行き交う道だったが、休日のことゆえ思ったよりも空いていた。ナビ画面に表示された到着予定時刻よりも、早く到着できそうだった。

商業地区を走る幹線道路を抜けると、辺りは農家が点在する田園地帯になった。細くなった道をどんどん車は進んだ。やがて、冬木立の向こうに兄を受け入れてくれる病院が見えて来た時、父は初めて口を開いた。

「近頃はナビというものがあるから便利だねえ。車でジッとしているのは大変だったろう。じきに着くからね、修平」

「修平、私の肩にもたれて寝ていますよ」

母の言葉に、父は速度を落として「そうか」とミラー越しに兄の様子を<sup>うかが</sup>窺った。ここに来て、父は初めてウウツと<sup>おえっ</sup>嗚咽した。

父は涙を流しながら前に視線を当てたまま、静かに運転を続けた。姉が無言でハンカチを渡すと、父は片手で受け取って頬をつたう涙を拭った。

誰も何も言葉を発さなかった。

兄がこういう状態では、犯人をあげて司直の手にゆだねて敵討ちしたいと思ったところでどうしようもないことは明白だった。  
やるせなさで胸が締め付けられる思いだった。

兄を精神病院に入れて担当医と今後の治療の話を簡単にして兵庫の家までたどり着いたとき、とっぴりと日暮れていた。私たちは深い虚脱感に襲われた。

想像していた以上に広大な土地に建つ病院は南欧に見られるリゾート・ホテルのように見えた。担当医もスタッフも働き盛りという年代で、はきはきとして親切だった。

「心配していたような陰湿な雰囲気は見られず、明るい病院でよかったわ」

母は涙を抑えた。「明るい病院」ということが、兄を一人残して帰ってきた我々家族の救いだった。

「このまますぐ休むから。明日はいつもどおりの時刻に起こしてくれ」

父は疲労困憊した顔で告げると、すぐに自室に入った。父が寝られないのは分かっていたが、私たちは「ゆっくり疲れを取って」と父の力の抜けた背中に言った。

平成十七年四月。二年に進級した私たちは、ゼミに所属することになった。私は庸子と相談して一緒に藤森ゼミに入った。

藤森陽一教授は学生時代に既に大きな文学賞を得ていた。四十年近く経つ現在も着実にヒット作を上梓している一流の純文学作家だった。十年ほど前に、学長がT女子大の誇る看板教授として三顧の礼をもって迎え入れた人材だった。

藤森ゼミの面接当日は、かなりの人が集まった。後から知ったことだが十五人の枠に、百人近い応募者が集まったらしい。簡単な口頭試問で藤森先生が何を基準にしたのか私たちには不明だったが、幸いにも私と庸子の二人は入ゼミを許可された。

藤森先生は往年のハリウッド・スター、ハンフリー・ボガードに似ていた。純文学作家の硬さがなくて、洒脱しゃだつという言葉がぴったりのダンディな紳士だった。

「君たち、今から申し上げておくが、卒業論文の代わりに小説を出してもいいですよ。タイトルは自由。長さも問いません。しかし、論文よりかなり点数は辛いものをご承知おき下さい。通常の論文ならAが取れやすいことは確かです。この二年時から卒業までの三年間という時間をかけて、テーマを決めてじっくり取り組んでください」

最初のゼミの授業の時の、藤森教授の言葉。それを聞いて、私の耳元で庸子が「理香は論文より小説のほうで挑戦するでしょ。文学賞をもらっているんだもの」とささやいた。私は首を横に振った。

「あれは偶然の受賞よ。高校三年のときの文学賞は、青春の思い出。大事にしまっておくことにして、論文で単位をもらうことにする」  
その時はそのように答えた。

郁子は退院して、元気に薬科大学に復帰していた。しかし、郁子が退院した後も、私と庸子は買い物ごとで隔週の割合で、戸田老人の見舞いに出掛けていた（根津と会わないようにと、土曜の午後に訪問するようにした）。根津以外、戸田老人には一人の見舞い客もなかったから。

素朴で憎めない孤独な老人は、いつも私たちの訪問を楽しみにしてくれていた。郁子の母が島根から出てきているときは、私一人で見舞った。

戸田老人を見舞う時、いつも兄のことが心をよぎった。私は月に一度兵庫に帰省し、そのときに兄を見舞っていたが、どう見ても兄に回復の兆しがあるとは思えなかった。

N市からJRを使って大阪駅に行き、それから地下鉄・御堂筋線にて難波まで出る。難波からは南海電鉄に乗り換え、病院のあるT町に向かう。家を出て病院に到着するまでの所要時間は二時間を越えた。幼い俊太郎を連れて行くわけにいかず、母と姉は交替で病院に出掛けていた。そして、行くたび、兄の足の指を撫でさすった。これは、ほとんど自室から出ようとしない兄の足の筋力の衰えを防ぐという意味もあったのだが、母が偶然チャンネルを合わせたテレビ番組の中で「事故で植物状態になった夫の足の先を始終マッサージするようにしていたら、ある日突然、意識が戻った」と若妻の奇跡のドラマというタイトルのドキュメンタリーを見たことによる。

「普段、あまりテレビを見ない私がああ番組を見たということは、神の啓示だと思った。きっと、修平もいつかはあんな風に回復できるはずよ」

姉はもちろんのこと、母は特に熱を入れて兄の萎えた足を「元気になってね」といいながら撫でつづけた。  
「だけどね、修平はされるがままで、取り立てて反応を見せないのが悲しいの」

電話のたび、姉は詳しく兄の様子を話してくれた。兄の状態が向上しているとは思えなかった。

父は日曜日を待って兄の愛読していた源氏物語の現代語訳を持って行って、読み聞かせていた。  
「古典が好きで国文学者になりたかったなら、最初からそうと云えばよかったのだ。医院なんて一代限りで閉めても良かったのだから」  
父は、自分が暗黙のうちに兄に医学部を強制したが為と自責の念で過ごしていた。  
「まだ小学校に入ったばかりの頃だが、『お父さんは内科専門だが、修平は外科に進んでくれたらいいなあ』と言ったことがある。『内科と外科とで病院に拡張できると楽しいな』と軽口をたたいたんだが、今思えば何ということをして口にしたのかと悔やまれる。あの時、修平はうなずいて『分かった』と答えたが、お父さんのその言葉が修平を呪縛<sup>じゅばく</sup>してしまったじゃないかと思うんだよ」

苦悩する父に、姉は「考え過ぎよ」と切り捨てた。  
「私は自分の意志のままに突き進んで離婚という苦い経験をしたけど、後悔していない。過去にタイムスリップしたとしても、同じ選択ををすると思う。自分が納得しない限り、引かない性格だから。修平は思いやりの深い性質だから自己主張することなく、仮に時計が逆回しできたとしても『古典を勉強したい』とは決して言わないと思うわ。そういう子なのよ。誰のせいでもない」  
「いや、お父さんがもっと配慮したら良かったんだ」  
姉は「いいえ」と答えた。  
「同じ親が育てても、私と修平とは真っ反対の性格でしょ。生まれついた気質というものがあるのよ。だから、お父さんもそしてお母さんも、自分を責める必要なんて全くないのよ」

兄は幼児のように気分に波があり、機嫌の悪いときは口をへの字に結んで誰とも視線を合わそうとしないのだった。そんな時、父は兄の背中にそっと頬をつけて「チュチュ君」と呼びかけた。幼い頃の兄が「しゅうへい君」と呼ばれて、「チュチュ君です」と周囲を沸かせたときのことを思い出しているのだ、と母は話した。

戸田老人の話は出来ないでいた。一回限りの見舞いのつもりが人柄に引かれて何回も訪れているとは、根津の実父であるだけにとても言い出せなかった。

私と庸子は見舞うとき、孤独な戸田老人にちょっとした手土産を持っていくようにした。それは折り紙であつたり五百円程度のプラモデルだつたりした。戸田老人の無聊<sup>ぶりょう</sup>を慰めようという、私たちの気持ちだった。

二人部屋なのに郁子の出たあとのベッドはずっと空いたままだつたから、戸田老人は「こんなの、作ったよ」と空いているベッドに折り紙細工を並べて見せた。舟や星や鶴が、皺だらけの無骨な手から実に器用に生み出されていた。

彼は海の話が好きでした。

「海ちゅうても、いろいろ在つての。日本海は特別じゃ。太平洋とも違う、瀬戸内海とも違う。特にの、荒れ狂う冬の海は男の海なんじゃ」

「冬の日本海は灰色で、なんだか寂しい感じがしますけど」

私たちが「そうかな」と首をかしげると、老人は「街の者には分からんよ。冬の灰色のたけり狂う日本海のすばらしさが街の者に分かるもんかい」とムキになった。

「そりゃそうと、あんたら、アラスカとシベリアの間の海峡名を知つとるかい」

「アラスカとシベリアの間？」

咄嗟には解答が浮かばなかつた。「何だっけ？」

「何というんですか」

庸子が尋ねると、戸田老人は満足げに小鼻をひくひくさせた。

「本当に知らねえんかい？ 理香さんも知んねえんかい？」

「咄嗟<sup>とっさ</sup>には思い出せなくて……」

「あれは、ベーリング海峡ちゅうんじゃ」

「そうだった、そうだった」

私たちが手を叩くと、老人はアハハと齒の抜けた口をあけて腹の底から楽しげに笑つた。

「じいちゃんが尋常小学校の時にたまたま授業開始の前に地図帳を見ていて『ははあ、アラスカとシベリアの間にある海峡はベーリング海峡ちゅうんかい』と思つた矢先、先生が教室に入ってきなさつて黒板に大きな世界地図を広げて『誰ぞ、アラスカとシベリアの間に横たわる海峡の名前を知つとるか』と聞いたから、サツと手を挙げて『それは、ベーリング海峡といひます』と答えたんじゃ。先生が『戸田、よう知つとつた』と褒めてくれたの、じいちゃんは嬉しかったもんやから今もよう覚えとるんじゃ」

彼はふと窓に目を向けた。昔を思いやる眼差しになっていた。

「司郎は上の四人の子供と違うての、こんまい頃から勉強がよう出来たんじゃ」

根津の名前がふいに出たので、私たちはハッとして目を見合わせた。

「いつも『俺は貧乏な漁師では終わりとうない。名士の仲間入りするんじゃ』言うて、奨学金を貰うて地元の大学を出たんはええんじやが、なかなか試験にうからんと。弁……」

言いかげ、戸田老人はハッとして口を手で押さえた。

「いや何、なりたいもんになかなかねんかってのう。つらがとったもんじゃ」

彼は、握った手の甲で目をゴシゴシこすった。

「口癖のように『のし上がるんじゃ』って言うとった。『無学な兄弟と会うのが恥ずかしい』ちゅうて、島根に帰りたがらんし。『年を取るにつれ、故郷の良さが分かるし身内の温かさが分かる』言うても、せせら笑うだけじゃしなあ。カエルの子は所詮、カエルじゃということをなんぼ言うても、司郎には分からんのじゃ。兄弟とも縁切ったも同然じゃし、上の兄弟は皆、司郎のことを心配しよるのに」  
「ひどいですよね」

私の言葉に、戸田老人は悲しげにかぶりを振った。

「わしも、もう長うない。何とか、司郎が兄弟仲良うしてほしいと願うとるだけなんじゃ」

私と庸子は視線をからませた。

「長くないだなんて、そんなこと」

「そうですよ。ちょっと辛抱していたら退院できますって」

戸田老人は「いいや」と、ベッドから足の先を出した。

「こんなに足の台に水がたまってしもうたら、お迎えが近いんじゃ。死んだ婆ちゃんから聞いとる。どんな人でも、足に水がたまったらおしまいなんじゃ。医者が言わずとも、わしには分かっとる」

ベッドから出た足の台を見ると、出来損ないの芋のようにパンパンに水が溜まって不細工にむくんでいた。

「死ぬのは怖うないんじゃ。あっちに行ったら、漁に出たまま戻ってこんかった父ちゃんや母ちゃんにも会えるしのう。じゃけん、死ぬのはちいっとも怖うない。ただのう、司郎のことが」

戸田老人はむせるように泣いた。

「あずり回ってはい上がろうとしとるだけで、哀れなもんと思えん。こんまい頃から『ええ生活したい。弁護士になったらそれが出来るんじゃ。飲まず食わずで勉強してでも、必ずはい上がってみせる』言うて、張りつめた糸みたいにいっつもギリギリしとった」

そこまで話すと、彼は突然布団をかぶって「済まねえのう、済まねえのう」と謝罪の言葉を繰り返した。

「司郎を周囲からの嫌われ者にしたんは、わしがふがないせいじゃ。わしの稼ぎが悪いせいで肩身の狭い思いで育った司郎は、あんな曲がった性根になってしもたんじゃけん。可哀想なことをしてもうた。許してつかあさい」

ここにも自分を責めている父親が居る……。そう感じたとき、彼に対する<sup>れんびん</sup>憐憫の情が、心にさざ波のように押し寄せてきた。

「戸田さん、泣かないで」

私はベッドに歩み寄ると、小刻みに揺れる布団の上から老人の体をソツと撫でた。

## 父性のスケッチ 6

初夏をむかえた六月、姉に降ってわいたように再婚の話が持ち込まれた。姉の、ゼミの恩師から持ち込まれた話だった。

「ずっと大学に残って植物細胞の代謝の研究をしている人なの。<sup>なかたに</sup>中谷先生の奥様の親戚筋にあたる人で、写真を見るとね、大きな熊さんみたいな印象で朴訥ないい人に思えるのよ。相手は『中谷のおばさんからの話なら、そろそろ身を固めることを考えようかな。初婚か再婚かなんか僕は気にしないよ、要は相性だからね。嫁さんと子供が同時に授かるのも楽しいかなあ』なんて、<sup>おうよう</sup>鷹揚なことを言ってるらしいわ。俊太郎が小さい今の内なら、実子感覚で付き合えるから結婚するなら早いほうがいいって、相手の親も賛成してくれているそうなの。『我が息子なれど、昔から変わり者だと思っていたから結婚する気になったことでまずは一安堵。嬉しい』って、特に彼のお母さんが大喜びしているらしいわ。お父さんもお母さんも『中谷先生ご夫妻の仲人なら、安心』って、<sup>もろて</sup>諸手を上げて賛成してくれているのよ。会ってみてお互いのフィーリングが合致したらの話だけど、真剣に再婚を考えてみようと思っているの」  
知らせる姉の声はいつになく、はずんでいた。

中谷公望というのが姉の所属していたゼミの恩師の名前である。幸生との結婚式の時にも新婦側の<sup>しゅひん</sup>主賓として列席してくれた人だ(ちなみに、幸生は別のゼミだったから違う教授が祝辞を述べた)。祝辞の中で、姉の熱心な授業態度からいかに頑張り屋さんだったかということ会場に響き渡る朗々とした声で語ってくれた。あの時しか会っていなかったが、容姿的に瘦身の父とよく似ていたこともあって私も姉同様、中谷先生に好感を持っていた。

「それにしても、急にどうして」

「修平のところに着替えを持っていく予定で、乗り換え駅に接続している難波のデパートの寝具売り場のフロアで夏の寝巻きを探していたら、先生のほうが先に気が付かれて声をかけてくださったの。ご夫婦で買い物に来ていらしてね。定年で退官されてから大阪府内の女子大の学長に就任されたことは伺っていたのだけど、偶然にも出くわすなんて思いもよらなくて」

紳士物のパジャマを手にしている姉を見て、白髪をきれいに結び上げた藍色の紗の着物をまとった品の良い中谷夫人が「ご主人のお買い物なの」と尋ねた時、姉は「弟のです」と言うなり涙がほとばしったという。

驚く中谷夫妻に問われるまま、<sup>せき</sup>堰を切ったように姉は家族を襲った不幸を語った。

「柔和な恩師夫婦の顔を見て、語らずにいられなかったのよ」

姉は、「昔から物静かで、周りの人の心を開かせるようなお人柄だったわ」と懐古した。

「私が『離婚に関しては私の見栄っ張りの性格が招いたことで、幼い息子に<sup>ふびん</sup>不憫なことをしたと思っています』と話して、しかも別れた

夫は母親が目の色変えて再婚相手を探している最中に急死してしまい、高山のお<sup>かあ</sup>義母さんは『俊太郎は縁のない孫でした』と周囲の人に切り捨てた言い方をしていたくせに、子供を渡せと突然、高山家から調停を起こされました。むろん渡しませんでしたが、調停の最中、相手方の弁護士がしつこく『代襲相続できなくなるぞ』と脅してきて、とてもいやな目をしました。弟のことは奇跡を信じるしかありません。父は『自分が医学部進学を暗に強要したからだ』と自分を責めて母と一緒にになって神仏に手を合わせる日々です。一家に生じた試練を私たちは耐え抜く覚悟ですが、時に絶望感に囚われることがあります」

姉が事の<sup>てんまつ</sup>顛末を語るのを、夫人は涙ぐんで聞いていたようだ。<sup>けいけん</sup>敬虔なクリスチャンの夫人は、生物資源学部に籍を置いてそのまま四十近くなってしまった息子を案ずる彼の母親から「良い嫁を」と頼まれていたことを思い出し、帰宅してすぐに彼に電話して「私たち夫婦が媒酌します。任せてちょうだい」と勧めたのだった。

「いろいろ遭ったけれど、お姉さんも俊太郎も運氣が良い方向に向いてきたのよ。良かったわね」

祝福して「それにしても、生物資源学部って聞きなれないけど、いかにも地味っぽい響きね」と言うと、姉は「そうなの。いかにも『じみー』って感じがするでしょ」とフフツと笑った。

「私が研究者の妻になるなんてね…….思ってもみなかったことよ」

「これって、お姉さんの言うところの上昇婚の一つ？」

「懐かしいな、その言葉『上昇婚』か……」

よほど可笑しかったのか、受話器の向こうで姉は大声でしばらく笑っていた。

「『女に生まれた限りは、上昇婚・玉の輿を狙う。私のモットー』だなんて言ってた時代があったわねえ。私も若かったんだな」

「それで、この再婚話はどうなの？」

「意地悪を言うのね。離婚以来、私は学んで一回り人格が磨かれたのよ。上昇婚でなく、目指すは魂の平和。今度は間違いなく幸せな結婚になると確信しているわ」

「幸せになってね、お姉さん」

「ええ。修平のためにも長女たる私がしっかりしないと」

最後の言葉は潤んで聞こえた。

この電話を切って一週間もしないうちに姉から再び電話があり、根津に関する怒りをぶちまけてきた。

「本当にいやになるわ。根津を弁護士綱紀委員会の懲罰会議にかけてやろうと思っているの」

声が震えるほどに、姉は怒っていた。

「懲罰会議って何？」

「文字通り、弁護士を懲罰するかどうか審査にかける会のことよ。調停はとっくに『不調』ということで終わっているのに……。まあ、聞いてちょうだいよ。とんでもない奴よ」

姉は「腹が立つたらないわ」と受話器の向こうで、一つ大きな息を吐いた。

「高木さんのご主人の信孝さんがタクシー・ドライバーをされていてね。それで、知らせてくれたのよ」

高木さんという人は父の医院に勤務しているスタッフ二人のうちの一りで、窓口担当の事務を受け持っていた。四十過ぎだが、童顔で小柄なせいもあって年よりも若く見えた。穏やかないい人だった。

「一体、何があったの？」

「虚偽発言をしていたのよ」

姉の話はこうだった。

根津の先輩格のF弁護士は高木信孝の勤務するタクシー会社の社長と懇意だったのでFはいつも信孝のタクシー会社を使っていた。

この日も早朝、Fから「三人乗せて六甲まで頼む」と依頼があったという。

「タクシー会社の事務局から高木さんの夫に『朝早いけれど、行ってくれ』と連絡があったのは偶然にせよ、運命の糸が引き合わせたように思う。他の人だったら、私の耳には入らなかったことだから」

姉は嘲笑するように「まさに『天網恢恢疎にして漏らさず』ってとこね」と言うと、一気に話した。

信孝が根津を含む三人の弁護士を乗せて六甲のゴルフ場に向かっていた時。車中の雑談の中で、Nという弁護士が「高山酒造の跡取り息子が死んで、あそこは大変らしいね。姪が高山酒造の分家の長男に嫁入りしている関係で内輪話を聞いたが、別れた奥さんが子供を離さぬらしい。高山家としては直系の孫だから引き取って手元で育てたいらしいが」と口火を切ったのが発端になった。

「高山酒造は一族会社だから、そりゃあ血筋を重視するだろう」

Fが答え、それまで黙っていた根津がそこで急に口をはさんで来たという。

「いやあ、僕も弱ってるんですよ。亡くなられた息子さんの別れた嫁さんというのがなかなかの人でしてこちらが誠意を尽くしても話にならぬのでね。僕は調停の席で『あまり欲張らないで』と言ってやりましたよ」

「ほう、君があそこの代理人だったのか」

「高山夫人に僕はえらく信頼されていましてね。金銭の面さえ折り合えば、いずれはこの話も一件落着でしょう」

「ほう、調停していたのか。最後は金額しだいでいいところかな」

根津は「そういうものでしょう」と哄笑したそう。

「まあ、何ということ」

「なにが『言ってやりましたよ』だわよ。大嘘つきのくせして」

「どうしてそんな出鱈目を言ったのかしら」

「会話の相手が同業者だから『仲間内の話』として法螺を吹きたかったのでしょうかよ。隆子さんが擲揄していたように『自分はこれくらい力があるんだ』と威張りたい、愚か者なんだから」

私は根津の顔を脳裏に浮かべ、つくづく呆れ返った。

「調停不調ということで話は既に終了しているし、第一、金銭的な話など私から一度もした覚えはないわ。私、懇々と高木さんに『真実はこうなのよ』と全部話したわ。高木さんも帰宅してご主人に話したら、『そんなとくだろうと思ったよ』って。『いくら弁護士仲間の雑談にせよ守秘義務があるわけだし、根津弁護士という男は以前からタクシー運転手を見下した言葉を吐き散らして大嫌いな奴だ。車中、弁護士三人しか居ないという前提でぺらぺら話したということは、タクシー運転手を人間とっていない証拠だ。僕の名前を出していいから抗議したらいい』って言ってくれているわ」

「抗議するの？」

姉は吐き出すように、「あんな男に抗議したって無駄よ」と言った。

「弁護士会に電話してこういう場合はどうしたらいいかと相談したの」

いつも姉は機敏なのだった。私は「さすがに、お姉さんは行動が早いよね」と感心した。

「そしたら、『そういった虚偽の発言をした弁護士を、弁護士綱紀委員会にかけて懲罰会議にかけることができます』と教えてくれたから、近いうちに手続きに行くつもり。少しは骨身にこたえるでしょうよ」

「そうよね。弁護士たるもの、守秘義務があるんだものね」

「守秘義務どころの騒ぎじゃないわよ。無いことを作って言いふらしたのよ。許せないわ」

話しているうち、ますます感情が昂<sup>たか</sup>ぶってきたのだろう。姉は「近いうちというより、明日一番に手続きをしてくるわ」と力んだ。

## 父性のスケッチ 7

夏以降、姉たちの交際は順調に進んで「挙式は平成十八年が明けてすぐに」という話に決定して、まずは十月最初の日曜の大安吉日の日に結納という運びになった。

兄の状態と経緯も、先方は十分に理解してくれた。

「人間界には絶対は存在しません。諦めずに頑張りましょう。神の奇跡を信じて」先方の母親の言葉。この言葉に、両親は感涙にむせんだ。

我が家にとって、姉の婚約は久しぶりの明るい出来事となった。

「彼と居るだけで、はねっ返りで気の強い私でも静かで優しくなれるのよ。不思議だわ」

姉はしじゅうのろけていた。

「運命の赤い糸ってあるのだと思う。乾いた大地に慈雨が沁み込むように、彼の存在は私から虚栄心を消滅させてくれるの。彼が自然体で生きているからだわ」

「おやおや。『大地に沁み込む慈雨』だなんて、お姉さんはいつから詩人になったの？」

「茶化さないでよ。私は本気なんだから」

会話から、姉が婚約者によって心の底から満たされているのが私にも手に取るように分かった。

「自然体で生きることが大事なのね。そうしたら、丸く生きれるもの」

姉からつぱりの影が消えていた。

当日、朝から快晴。行楽日びよりと呼べる心地よい日だった。この日朝一番に、母は庭に出て「めでたい結納の日が好天で、先行きを暗示するようだわ」と、太陽に向かって手を合わせた。父は父で喜びを抑えられなくて「俊ちゃんにパパが来てくれるよ」と俊太郎に何度も頼ずりしては、幼い孫から「痛い」と嫌がられていた。

私は前日の土曜午前中に京都から兵庫に戻っていた。土曜日、昼食の後「修平に報告したい」と言う姉と二人、兄の病院に出掛けることにした。

出掛ける際、父が診療室から顔を出した。

「修平のような状態の人ってね、表現する能力が破壊されているだけで、体の芯は活発に動いているんじゃないかなって思うんだよ」

父は真剣だった。

「だからね、美和。これこれこういうことになった、相手の男性もいい人で修平が治って帰るのを待っていてくれるって、きちっと修平に伝えるんだよ。反応しなくとも聞いているんだからね」

姉は優しく微笑んで「そうね」と答えた。

「お父さんの願望を語っているのよ」

電車に揺られながら、姉はつぶやいた。「治らないのに」

「治らないかもしれない。でも、治るかもしれない。『治らない』って言ってしまっただけは駄目よ。言葉には魂があるのよ、<sup>ことだま</sup>言霊って昔から言われているじゃないの」

私が訂正を促すと、姉も素直にうなずいて「治る。きっと治る」と強く言い直した。

難波で私鉄に乗り換えて電車が南下するにつれて、窓からみえる景色は街の風景ではなくなり、田園風景へと変わっていった。

「お兄さんが入院する羽目にならなかつたら、こんな田舎に向いてくることはなかったわね」

「そうねえ。まず来なかったでしょうね」

「場所も人間の出会いも、考えたら不思議なものね。運命をつかさどる神様がいらして、あれこれ天界で図っているに違いない。そう思わない？」

姉は無言で大きくうなずいた。

気分のよいときの兄はベッドからおりて揺り椅子に腰掛けたまま何時間も同じ姿勢で窓から外をながめ、気分がすぐれぬときは「いやー」と語尾を伸ばして全くベッドから出ようとしなかった。

「お兄さん、理香よ」

呼びかけても、兄はベッドの中に居てとろんとした眼差しで私を見つめるだけだった。

(私ったら、戸田さんを見舞う回数のほうが多い)

兄に済まない気持ちでいっぱいになった。

(言い訳がましいが、戸田さんは話せば返事する。反応がある。だけど、お兄さんにはそれが皆無なのだから仕方ないじゃない) 他人の、しかも姉を苦悩させる弁護士の父親なのに……。自分はひどいと思った。兄をもっと頻繁に見舞おう、と心に誓った。「お姉さんね、また結婚するの。もう一回花嫁さんになるの。明日が結納なのよ。彼も彼のお父様やお母様も修平の帰りを待っていてくれるわ」

姉の言葉にも、兄は「いやー」とくぐもった声を出すだけだった。私が兄の手を取ると、私にも「いやー」と拒否反応を示した。

もとより線の細い兄だったが、今は「<sup>かそけ</sup>幽し」という表現がぴったりの状態だった。

「万葉集に、吹く風の音のかそけし、という句が出てくるんだけど、僕の生き様こそ、かそけしって気がするんだよ。医者に向いていないのに医者にならねばと鬱々としている僕、かそけき僕……。『かそけし』ってね、幽玄の幽って字を書くんだよ」

三浪に突入した時に兄と二人で縁側に腰掛けて話したときの言葉だ。妙にあの時、心に残ったのは、虫の知らせというものだろうか...

...

(お兄さんは一体、どういう状態で辰野美弥子の誘いに乗ったのだろうか)

兄の回復が見込めぬ以上、真実はもはや解明されようもなかった。兄の将来の回復についていくら考えても「不毛」という言葉しか浮かばないのだった。

ひたすら哀しく、ひたすらせつなかつた。

日曜。姉の結納が午前中に終わって、中谷先生ご夫婦ともども両家が我が家の座敷で割烹から取り寄せた料理で食事会をした。お相手もその両親もいたってジェントルな人たちで、誰も幸せが予感されるのだった。季節にあわせた菊の花柄の訪問着を身にまとった姉は美貌が一段と冴えわたり、実の姉ながら天女のように見惚れた。

最初は照れて母から離れなかった俊太郎だったが、姉と結納を交わしたばかりの婚約者が「新米パパだよ」と両手を広げると、「パパ」と抱きついていった。皆、破顔一笑し、和気あいあいとした雰囲気にも包まれた。

「こんな日が来るなんて」

母は喜びの涙を抑えきれず、俊太郎から「バーバはおなかが痛いのか？ どうして泣くの」としつこく聞かれていた。

翌月曜は一時限目から授業のある日だったので、私はこの日夕方には京都に戻った。そして、その足で戸田老人を一人で見舞うことにした。何ということもない、ただ素朴なあの老人と話してみたかった。

姉はあの怒りの電話の翌日すぐに根津を綱紀委員会にかけよう手続きを済ませていたが、まだ開かれていないみたいなことを言っていた。祝いの席で、こうした話ははばかられたので詳しくは私も聞いていなかった。

午後五時を回っていた。日曜でもこの時間には根津は居ないものと決めてかかっていたので、病院の玄関ホール横の花屋で根津の姿を見た私はギョッとして足を止めた。

「赤い薔薇<sup>ばら</sup>を適当に包んで。リボンはいいよ」

グレイの長袖ポロシャツ姿のラフな格好をした彼は何が気に入らないのか、傍目<sup>はため</sup>にもはっきり分かるほどの仏頂面<sup>ぶつちようづら</sup>をしていた。

「これで宜しいですか」

「どうだっていいよ」

アルバイトらしい若い男性店員にぞんざいにお金を払うと、根津は私のわきを通過してスッと出ていった。

「何に致しましょう」

店員から促されて、私は手近なところで目についたアレンジされた花かごを「これでいいですから」と指さした。根津を見かけた途端、ゆっくりと花を選ぶ気持ちが完全に失せてしまった。ガッカリした……そういう気持ち。

意外にも、時間をずらそうと入った二階の喫茶室で再び彼と出くわした。

(あれれ、弱ったな)

窓際の席に、根津は白いドクター・スーツの若い医者と向かい合って座っているではないか。

腕時計を見た。

先に戸田老人を見舞おうかとも思ったが、それでは根津がいつ入ってくるかハラハラして戸田老人とゆっくり話ができなくなると案じられた。

(せっかく来たんだし、しばらく様子を見てみよう。根津のことだから長くは見舞わないだろうから)

診療日ではないので客の数も少なくて手持ち無沙汰な顔で壁際に立っていた中年のウエイトレスから「どうぞ」と導かれた席は、根津の座っている席と背中合わせになっている位置だった。一瞬「あっちのほうの席に」と言いかけたが、自分が意図して座った席ではないし……と思いなおした。

「コーヒーを」

背後を意識しすぎるあまり、つい注文する声まで小さくなってしまった。

「……ということですよ」

医者が言い、根津が「しかし」と答えている。

「しかしですなあ、島根に連れもどったほうがいいと言われても困ります話ですなあ」

「ここの院長はQ・O・Lというものを非常に尊重している人なんです。だから、戸田さんの余命がもうじき尽きると分かっている今、主治医の僕に『戸田さんの最期の希望をかなえて自宅に戻してあげるように君から家族に勧告しなさい』と言っておられるんですよ。それで、腹を割ってゆっくり話そうと思ってこうして喫茶室にお呼びしたんです」

「ああ、Q・O・Lね。その話をしたくて、僕をこうして呼びつけたのですね」

根津の、人を食ったような声が響いた。

「クオリティ・オブ・ライフの意味くらい、僕だって知っていますよ。これでも、兵庫医師会の顧問弁護士も務めていましたから」

「そうですか、それなら話が早い。じきにモルヒネも効かなくなるでしょう。そうなる前に、あれほど『故郷<sup>ふるさと</sup>の海が見たい』と言っておられるお父さんを島根に連れもどってあげたら如何ですか」

「お荷物の老人を一人処分したいだけなんじゃないですか。それなりに院長には包んでいるはずだが」

フンと鼻先で笑う根津の顔が目に浮かぶようだった。

「何を言うんですか」

若い医者は声を荒げた。私は背中に神経を集中させた。耳が後ろ向きになりそうで、口バの耳になったような気分がした。

「僕はね、消化器系の権威と呼ばれる偉い先生がいるからこそ、親父をこの病院に入れたんですよ。僕なりの誠意ですよ。だから、最期まで診ていただきたいですなあ」

「僕たち医療関係者は患者さんに良かれと思うことしか言いませんし、しません。隣のベッドが空いてもわざわざあの部屋には他に患者を入れないように配慮しているのが、あなたには分からないのですか。じきにモルヒネでも痛みをこらえられない日が来ると分かっているからですよ」

「ほう、それはどうも」

小馬鹿にした雰囲気伝わってきた。

「『それはどうも』じゃないですよ。いいですか、院長を筆頭にここの医者は皆、Q・O・Lを尊重しています。実際、僕の母もガンで先年亡くなりましたが、『病院で薬づけされて延命してもらいより孫に囲まれて家で死にたい』という希望どおり、自宅にもどって息子や孫たちに囲まれての幸せな最期を迎えました。母も満足だったろうと思います。最期が近いと悟った母は皆の一人一人に『有り難う』と言って旅立ちましたからね。人間の尊厳というものを考えた時、患者個人個人のQ・O・Lを無視してはいけないのです」

「あなたの母上の話はいい」

業を煮やしたか、根津が声を荒げた。

(品のない男)

私は顔をしかめた。底辺から這い上がってきた人物は酸いも甘いもよく分かっていると聞くけれど、根津の場合は例外のようだった。

(弱者には強く当たって、強者にはへつらうタイプなんだわ)

若い医者だからここまで横柄な口の利き方ができるのだ、と思った。父親が世話になっている医者なのに。

戸田老人は学問はないが人間として品がある。一方の根津は、学問は受けているが人間的な品格というものが欠如していた。これは育ちというより、生まれついた資質ではなかろうか。きっと、どうしようもない資質というものがあるに違いない……

背後の会話は続いていた。

「僕としては、あと一ヶ月ももたない親父ならここで看取ってほしいと頼んでいるだけなんだ。院長にそう伝えていただきたい。あなたは若いし院長の意志に反することを伝えるにくいというなら、兵庫医師会の会長からここの院長に伝えていただこう」

「戸田さん、一体あなたは」

「僕は戸田じゃない、根津です。弁護士根津です」

呆れかえった私はさすがに後ろを振り返った。

背中合わせの根津の顔は分からなかったが、気色ばんだ若い医者と目が合った。

いかにも正義感の強そうな精悍<sup>せいかん</sup>な顔付きのその医者は眉間にキュッとしわを寄せ、椅子から立ち上がった。

「あなたが弁護士であろうとなかろうと、そんなことは一切関係ない話です。当病院の意向は伝えました。Q・O・Lについて、もっと勉強してください」

彼は不快感あらわに言い放つと、「では、これで失礼する」と去っていった。

私も根津を見下す思いで静かに席を立った。そして、病院のナース・センターに先ほど買った花かごを届けた。

「まだ面会時間中ですから、ご自分でお届けになったらどうですか」

窓口の若い看護師に、私は「先客がいらっしゃるようだから」と断った。

「何か、メッセージを添えてはどうですか」

「ああ、そうですね」

私はバッグに入れた手帳を取り出した。中のページを一枚破りにとって短いメッセージを書いた。

『早く元気になって島根に戻って日本海の四季の色をその目でご覧ください。理香より』  
先程の根津の言葉を思い起こし、怒りでペンを持つ手が震えた。

## 父性のスケッチ 8

翌日、学校の帰りに私は再び一人で戸田老人を訪ねた。偶然に知ったことにせよ、彼の時間が残り少ないと分かった以上、次の休日まで待てなかった。庸子にも話さなかった。戸田老人という、一人の人間の残りの命について話すことがはばかられたからだ。

死ぬということは、泣いたり笑ったり怒ったりしながら生きてきた人が人間社会から抹消されることだ。遺族によって葬式をしてもらい、<sup>れいきゅうしゃ</sup>霊柩車に乗せられ焼き場で焼かれる。そして、主要な骨が骨壺に詰め込まれ、暗い墓に永久に閉じ込められる。

永遠に続く眠り。

(どういう世界だろう)

怖かった。

私は、孤独な彼に何かしてあげたかった。

(どうして、根津は父親の死期が迫っているというのに冷静でいられるのだろうか)

病室に入っていくと、戸田老人は点滴している最中だった。

退院した後の郁子のベッドがずっと空いていることに前々から気付いてはいたが、理由を知った今となっては心が痛んだ。

「こんにちわ、戸田さん」

戸田老人は目をしてブツブツ何か言っていた。「戸田さん」と呼ばれて、「おう」と目をあけるとニッコリした。

「おう、これは理香さんやないか」

「寝てらした？ 起こしてごめんなさい」

「境内の鳩に花あられをやったら、いっぱいいっぱい鳩が空から飛んできてのう」

「鳩？」

「そんな夢を見たんじゃが、夢というより子供の頃の記憶じゃったかいなあと考えとったとこよ」

戸田老人は、「おかしいのう」と口をあけて笑った。入れ歯を外しているの、数本しか歯が残っていなかった。それでも、いやな感じは受けなかった。

「子供の頃の記憶を思い出すのか、近ごろは子供の頃に遊んだ場所がよう夢に出てくるんよのう」

「子供の頃、<sup>けいだい</sup>境内で鳩にお菓子をあげていたんですか」

「うん。海岸近くに、漁の無事を祈る神社があつての。今も漁に出る前は皆がパンパンと手を合わす神社なんじゃ。夏になるとそこで縁日が開かれての、司郎たちの手を引いて出掛けたもんじゃった」

戸田老人は点滴してないほうの手で顔をぐりぐり撫でた。

「そう言やあ、花を有り難うね。司郎も珍しく薔薇なんぞ買うてきて、その時に看護婦が花籠を持って入ってきたもんで『隣のベッドにいた郁子ちゃんを見舞っていた女の子からじゃ』って言うたら、『父ちゃんのことだから、またベーリング海峡の話なんぞして、ついでに余計な話までせんかったか』と叱られてしもうて」

根津があの際に買っていた赤い薔薇が五本、牛乳ビンに無造作に挿し込まれてあるのを見て、私は眉をひそめた。

(切り花を買ったなら、花瓶が必要ということが分からないのかしら……)

無性に腹立ちを感じた。

「司郎は馬鹿なんじゃ。こんまい頃から『カエルの子はカエルじゃ。無理な背伸びするもんでねえぞ』と言うても、司郎は『俺は父ちゃんや兄ちゃんみたいな海のことしか分からん一漁師で終わるもんか。見事、はい上がってみせる』言うてカリカリ勉強ばかりしよつてのう」

老人はポロポロ、大粒の涙を流した。

「周囲の皆とも付き合わんで勉強だけして、今は県会議員さんとも一緒にゴルフもできるようになったちゅうて、そげなくだらない事を自慢するだけの馬鹿になってしもうて。『島根の母ちゃんを見舞え』言うても一向に戻りたがらんし、学問のない自分の兄たちが恥ずかしい言うて兄弟の誰とも付き合わん。何であんなに曲がった性格になったんかのう。三つか四つの頃は島根の海で上の兄たちとダンゴになって砂遊びやら貝拾いしとったもんよ。素直で可愛かったになあ」

戸田老人は目をして「司郎が、司郎が」と何やら口の内で言っていたが、そのままスースー寝息を立てて寝入ったようだった。

私は点滴の残量を確認してから、一階の売店に降りて薄水色をした花瓶を一つ買った。それを部屋に持ち帰って病室の隅にある洗面台で洗って、サイドテーブルにある牛乳ビンに挿された五本の赤い薔薇を花瓶に入れかえた。

「済まんのう」

「あっ、起こしてしまいましたか」

ハッとして私は振り返った。

「起こして、ごめんなさい」

が、戸田老人は起きてはいなかった。覚醒していないまま、涙を流していたのだ。

「済まんのう。司郎のこと、済まんのう。あんな息子でもわしは可愛いてならんのじゃ、許してやってのう。勘弁してやってのう。嫌わんとってやってのう」

私は目をこらして老人を見た。

(この人は寝ていても息子のことを心配して、周囲に詫言続けているんだわ)

胸がつまり、ポッと「父性の<sup>ごんげ</sup>権化」という言葉が脳裏をよぎった。

「戸田さん、心配しないで」

彼の耳元で「大丈夫よ」とささやいてから、私は病室を出た。ナース・センターに寄って「戸田さんの点滴が終わりそうです」と知らせると、病院の外に出て携帯から姉に電話した。

かいつまんで経緯を話し、「だから、根津を綱紀委員会の懲罰会議にかけるのを取り下げてほしい」と頼んだ。

姉は少し考えている風だったが「分かった」と理解を示してくれた。

「お父さんも戸田さんも、父性の権化よ」

「父性の権化か。泣かせる言葉じゃないの」

「息子の行く末を案じて自分が悪かったと責めているのよ、なにも悪くないのに……。可哀想でならないわ」

「そこまで言われると、振り上げた<sup>こぶし</sup>拳を下ろさないわけにはいかないわね。この電話を切ったらすぐ、弁護士会に取り下げの電話をしておくわ」

「そうしてくれる？ 本当に有り難う。有り難う、お姉さん」

「根津は理香に感謝すべきだわね」

姉は小声で「お・ひ・と・よ・し」と言うと、電話を切った。

再度、病院に戻った私は売店で便箋と封筒を買い、その場で根津に宛て短い手紙をしたためた。

私は戸田さんをお見舞いしているうちに、戸田さんが息子である根津弁護士さんのことを案じておられることを知りました。

あなたの、姉に関する虚偽の発言によって姉は非常に傷ついていったんは綱紀委員会にかけ手続きを致しました。

しかし、戸田さんのあなたへの深い親心を話しましたら「今回は懲罰会議にかけ控える」と取り下げることを了解してくれました。二度と作り話をしないようにしてください。

それと、お父さんの意識がはっきりしている内には是非とも島根に連れもどって日本海を見せて差し上げてください。

山之内美和・妹

封筒の表に「神戸市灘区〇〇町、根津法律事務所・根津司郎先生」と書きかけた私だったが、この人に「先生」と尊称を使う理由は私にはないと思い、「根津司郎様」と書き直した。それを病院の玄関脇に設置されたポストに投函した私は、これにてもはや戸田老人を訪ねることはないだろうと思いながら病院を後にした。

晩からずっと机に向かい、私は二人の父親をモデルにした『父性のスケッチ』プロットを一気に書き上げた。

(今日学校に行ったら一番に、藤森先生に見ていただこう)

息子をひたすら案じながら死へ刻々と向かっている老いた父親と、息子の奇跡の回復を願って源氏物語の朗読を続けながら老いに向かう父親。二つの父性の物語。

父性をどこまで書き込めるか分からなかったけれど、今から三年かけて書き上げる予定の作品が「小説家として大成してもしなくとも、これからもずっと小説を書いていこう」という決意の作となることだけは分かっていた。

カーテン越しに白々と日が差し込んできた。私にとってエポックの到来となった朝が今、明けようとしていた。(了)